

〈退職記念〉

## 日本医科大学での十年およびこの半世紀を回顧して

日本医科大学外国語教室教授

崎村耕二

### はじめに

このたび定年退職を迎えるに際し、退任の挨拶を掲載するので原稿を書くよう編集長より所望されました。基礎科学教職員の皆様には、教育・研究・運営の面で、大変お世話になり、感謝の言葉しかありません。その言葉だけ伝えれば心残りはありません。

ただ、この紀要は一定の編集体制のもとに学術論文や報告文を毎年、刊行してきた実績があり、学内外で小さな一つの存在を獲得しています。その意味で、学術論文ではないものの、何か社会的な意味をもつ記事に思いをまとめてみようと考えました。

済世学舎に遡る本学の歴史に照らせば日本医科大学の存在は、野口英世や肥沼信次をはじめとする多くの先人の功績の上に成り立っています。その医学・医療への貢献は、当然、歴史的記録に値するものとして、文献に一筆一筆書き記されて来ましたし、またこれからも記されていくでしょう。しかし華々しい社会的成果だけにすべての価値があるわけではないでしょう。「歴史に名を残す」という目的意識とはかかわりなくこの大きな大学組織を日常支えているあらゆる教職員の皆様ひとりひとりの足跡は、小さなものであっても「残っていく」に違いありません。

以前、本学の歴史を調べる機会があり、百年近く前の学事資料の古びたページをめくったことがあります。そこには、たとえば当時の「予科課程」(現在の基礎科学課程に相当)の欄に「～学教授」と記載されているものの、その人の業績が傍証できない方もおられます。しかし、他の人の別の文献の片隅にたまたまその人の名前を発見したとき、他者との関係の中にその人の社会的存在を確認す

(6)

ることができました。つまり、単体としてではなく他者との関係において記録に価値が出てくるということがわかります。以上の意味を込めて書いた以下の記事は、自画像のようなものを描いてみる企てとして書きましたが、同時に、私が必然・偶然にかかわりなく出会った人々の人物像になっています。その何人かは歴史にその名を記録される人々です。

細かく見出しを立てているのは、少しでも興味を惹かれる内容があればそこだけ読んでいただく助けとするためです。全体として統一した構成はとっていませんが大体において導入部分で現在のことを述べ、それから私の思い出ばなしを時系列で述べています。

## 1. 本学への着任とカリキュラム改訂

### 【2013年 日本医科大学に着任する】

本学への着任は、正確には2013年9月1日である。全国公募によって教授に選任され、京都の理工系国立大学より、日本有数の東京の私立医科大学へ転任したことは私にとって大きな跳躍であった。着任後、外国語担当の教授席がそれまで二十年以上の間、空席だったということを知られた。また医学部では「外国語教室」や「科目責任者」という名称が用いられるということも知った。理事会で辞令をいただくときに、理事長から直接、お言葉があった。それは、英語教育に関する要望であった。その内容は「医学においては英語で論文を書くことが重要なのでライティングの教育に取り組んでほしい、」それから「とにかく話すことができるようにしてほしい」という二点に要約できる。そのほかのこともお聞きした記憶があるが、いずれも無駄な言葉がなく、きわめて的をついた内容であった。私はそれまで文科系の環境で過ごしてきており、しかも英語教育理論の専門知識を饒舌に語る専門家に囲まれていたが、これほど重厚な見解を短時間で明瞭簡潔に力強く語られたのを聞いたことはこれまでなかった。赴任早々、本学の質の高さを一瞬で垣間見たように思った。そして教員の方々のご発言や物腰を拝見しているうち、優れた組織に身を置いたことを実感した。

### 【2013年～2015 外国語カリキュラムを一部改訂する】

本学ですぐに目を向けたのは、外国語カリキュラムであった。そして一部改訂を行った。形式的にはマイナーな改訂であったが、実質的には本学の外国語の在

り方を大きく軌道修正する試みであった。まず、選択必修科目に指定されていたドイツ語とフランス語を廃止した。これは形式上、一行で表現できるほど小さなことに見えるが、実質的には大きな改革であった。濟世学舎に遡れば、本学ではドイツ語の授業の火が消えたことはなかった。しかも、「ドイツ語すなわち医学の言語」という明治時代以来の取り扱いが医学界の通念を反映して戦後のある時期まで揺るぎ無かった。日本全国の多くの医学部で第二外国語としてのドイツ語などの履修が課されていることは承知していたが、21世紀の現代日本で、医学のための外国語は何かを考えた場合、教育課程の限られた時間数で行うべきことは英語学習に全力を挙げるべきだ、という主張は自明の結論に見えた。しかし、上記のような大きな軌道修正になるため、教務部委員会の審議に備えるためにも、私なりに根拠づけの資料を集めた。本学の卒業生の一部からも直接意見を求め、過去約100年間の教務資料や教授会資料にも目を通した。当時たまたま本学に在職していたドイツ人医師と話をする機会があり、「どうして日本の医学部でドイツ語が必修科目になっているか理解できない」という率直な反応を聞いたことも私の確信を強めてくれた。

当のドイツの医師たちにとって英語が研究発表や学術交流の重要な言語になっており、ドイツ国内の大部分のジャーナルが英語で刊行されているという事実の裏付けもあったが、私にはもっと現実的な語学的根拠があった。日本が西洋医学へ舵を取った明治初期においてドイツ（プロイセンからドイツ帝国へ発展する時期のドイツ）が医学先進国だったという事実および、その事実が以後の日本に与えた歴史的影響を一旦視野の外におき、ドイツ語学習が現代日本の医学の発展にどれほど寄与できるかと考えた場合、英語の前で影が薄くなることは明らかであった。ここで詳述はできないが、医学用語に関する限り、ドイツ語であっても英語であっても、語形成を少し観察すれば、ヨーロッパの多くの言語がラテン語（あるいはラテン語経由でヨーロッパ中に広まった古代ギリシャ語系）の語彙系統を共有していることは明らかである。

### 【ドイツ語から和訳された医学用語「血友病」と「帝王切開」について】

「血友病」という言葉の由来を例に取ろう。この病名は、ドイツ人Friedrich Hopffによる造語Hæmorrhaphilieが後にHämophilieと記されて広まったものであるが、このドイツ語が明治時代に、*haemo* (=blood), *philie* (=loving) という語形成に基づいて和訳されたゲルマン語系の語彙の代わりに古代ギリシャ語系の語

(8)

形成要素を用いて医学用語を作りそして使い続けてきたのは、ヨーロッパの伝統に従った結果である。つまり学術の世界では、ヨーロッパのいわば共通言語はラテン語であり、そのラテン語の語彙の多くは古代ギリシャ語に由来するのである。Hæmophilie はドイツ語から英語に借用され、hæmophilia として使われて今日にいたっている。ゲルマン系の語彙はいわば日常の手あかにまみれているので、抽象的な意味あるいは客観的な視点で学術的概念を表そうとすればおのずと各国の民族の言葉から離れることになる。血友病はドイツ語では Bluterkrankheit (英語では bleeding disorder) とも呼ぶが、患者を Bluter (英 bleeder) と呼ぶ習慣には差別的なニュアンスが含まれていることが指摘されている。(もっとも「血友病」という用語が中立的な客観性を持っているとも思われれないが、この病気の研究が進展し始めた19世紀の半ばにすでに hæmophilia という呼び名への違和感が表明されている。)

もっとも他の言語に比べてドイツ語は土着の語彙を保持する傾向が強いので、もともとラテン語から発展したフランス語はもちろん英語に比べても、ゲルマン系の語彙が科学・医学の専門用語に入ってきてやすい。一つ例を挙げよう。「帝王切開」を意味するドイツ語は Kaiserschnitt であるが、英語では caesarean section, フランス語では (operation) césarienne なので、ラテン語の由来をドイツ語は共有していない。明治27年刊行の『羅獨和医学辞典』が手元にあるが、見出しに Kaiserschnitt とあり、「皇帝切開術」という訳が示されている。Kaiser は「皇帝」であり19世紀のドイツ皇帝を意識した訳だろう。「ユリウス・カエサルは帝王切開によって生まれた」という間違っただん伝説がこの言葉の由来になっている、という語源説を受け入れるならば、カエサルは「皇帝」ではなかったので矛盾が起きる。カエサルがディクタールとして古代ローマの頂点にのぼりつめたのは共和制においてであり、次のアウグストゥスが皇帝としては初代だったという歴史的事実に照らして、「Kaiserschnitt= 皇帝切開術」という訳はその後訂正されねばならなかった。

ドイツは、一地域にすぎず、その言語・文化がヨーロッパでは普遍性を持つことはなかった。歴史的にその試みがあったことは、ドイツ文化のゲルマン的な要素を主張するフィヒテの有名な演説や20世紀の不幸な出来事にもみられるが、すくなくともヨーロッパに由来する自然科学の分野に関する限り、学術的概念の言語表現は、古代ギリシャ・古代ローマにその源を持つ、ということはこれまで変わらなかったしこれからも変わらないだろう。

古代ローマが空前の大帝国を築き、数百年の間その力を維持したということが世界史の中で持つ意味は途方もなく大きい、言語に絞って考えてみてもその影響力は大きい。ヨーロッパ各国の言語のうちロマンス諸語と呼ばれているイタリア語、フランス語、スペイン語、ルーマニア語は、ラテン語の子孫と言えるので、古代ローマの言語的遺産の正当な相続者と言えるだろう。英語の中のラテン語系語彙は、11世紀以降のノルマン・フランス語の流入を通して入って来たものと、近代科学以降の発展の過程で新しく採用されたラテン語（あるいはギリシャ語起源のラテン語）との二系統がある。その多くは *hæmophilia* のように造語されたものである。

欧米の現代医学は、上記のような過程で採用され造語された多くの専門用語を共有していることは多くの例から明らかである。またドイツ文化の地域性に照らして、学術の世界でドイツ語が古代ローマ文化のような伝播性を獲得したこともなかったし、今後もないであろう。現代日本において欧米の最先端の知識を取り入れる必要上、医学部の外国語教育においてドイツ語が、多くの時間を割いて学習すべき有意な一般的価値を持つかどうか疑問である。現代語としては英語を学習し、医学英語（あるいは日本語の医学専門用語）の理解を深めるためにヨーロッパの文化の知識を含めたギリシャ語系・ラテン語系の語源・語形成を学習すべきだと私は考える。

### 【ヨーロッパで共有されてきた知の遺産：古代ギリシア・ローマ】

先のカリキュラム改訂でドイツ語が消えた理由にもどらう。ドイツ医学においてもゲルマン語系の語彙ではなく、古代ギリシャ語系の語彙を用いて医学用語を作りそして使い続けてきたのは、ヨーロッパの伝統に従った結果である。つまり学術の世界では、ヨーロッパのいわば共通言語はラテン語であり、科学に関する限りラテン語の語彙の多くは古代ギリシャ語に由来するのである。例としては、*clinic* (*clinicus* ← *klimikos*)、*atom* (*atomus* ← *atomos*) などがある。

### 【明治時代以降に影響力をもったドイツ医学・ドイツ語】

なお、そもそも明治時代初頭にイギリス医学、オランダ医学、ドイツ医学という三つの選択肢のうちドイツが選ばれ結果的にドイツ語が医学の外国語になった事情に関してはすでに論考がなされている（笠原英彦、「医制制定と医学教育行政の確立」、法學研究：法律・政治・社会（慶應義塾大学法学研究会，Vol. 57, No. 6,

1999年；吉良枝郎，「明治維新の際，日本の医療体制に何がおこったか：西洋医学選択の道のり」，日東医誌，Vol. 57, No. 6, 2006年）；安田健次郎「西洋医学の伝来とドイツ医学の選択」，慶応医学，Vol. 84, No. 2, 2007年）。

当初，蘭学の系統を引くオランダ医学派の長州藩とイギリス医学派の薩摩藩とが拮抗して争っていたが，明治初年の政治的な力も加わり，第三の選択肢が浮上りドイツ医学で決着した，という経緯も指摘されている。私は生真面目なほど勤勉で規律正しいドイツ人の医師のふるまいも影響したのではないかと想像する。

ひとたびドイツ医学が主流になれば，ドイツ語で書かれた文献を読む力が問われることになる。そしてドイツ語の医学用語を覚えることになる。旧制大学医学部，医学専門学校ではドイツ語が主要科目の扱いであった。解剖学ではラテン語が重要なので本学でもラテン語が教えられていた時期があったが，表の顔はドイツ語である。多くの若い医師・医学研究者たちがドイツへ留学した。日本で起きたことを一つ挙げれば，情報の閉鎖性である。これは，ドイツ語を理解する者同士では知り得ることが，他の者たちに開示されない，逆に，ドイツ語を理解しない者は，無知の状態に置かれる，ということ意味する。その典型的な例を作家の三島由紀夫が作品に残してくれているので，下に引用する。

それは，くもつた早春の寒い朝であつた。私は，自動車で母をそこへ連れていく道すがら，実に重苦しいいやな気がした。病院に着いて先生の部屋に通され，容態を話す間，先生はニコニコして聞いてくれた。ところが，母の喉元にさはると，先生の顔色は変り，その困惑した表情は，母にもすぐ分つたやうである，ただちに，もう一人助手の先生を呼んで，二人で母の喉を触診し出した。ドイツ語で危険を意味するゲフェルリヒといふ言葉が，先生の口から漏れた。私の顔色も変つた。事態は容易ならないやうに思はれた。

「母を語る—私の最上の読者」（初出『婦人生活』1958年10月号，  
『三島由紀夫全集』補巻1巻，新潮社，1976年）

ここで医師が使ったドイツ語 *geferlich* は，この場面では医師と助手の間の内密のコミュニケーションのために使われている。明治以来，医学の言語を席捲していたドイツ語は，一般人に対して医学・医療の情報を閉ざす働きをした。上記はそれをうかがわせるという意味で興味深い。しかしまた同時に興味深く示して

いるのは、戦前の旧制高校から帝国大学へ進学した学歴を持つエリート、特に三島由紀夫のようにドイツ語を得意とするものがその閉じた世界をたまたま共有できた、という事実である。

## 2. 日本医科大学で「医学英語の語源と語形成」を教える

### 【ギリシャ語とラテン語の重要性】

日本の医学部でなぜドイツ語をそれほど重視しているのかわからない、という上記ドイツ人医師の当惑が私の目に自然に思われるのは、欧米で教育を受けた人であれば、ヨーロッパの学校や学術分野におけるラテン語・ギリシャ語の位置づけを自然に理解しているからであり、反面、日本ではそれが自然に理解できないのは、明治以降の旧制高校・旧制大学の時代から今日まで、英語・ドイツ語・フランス語の3つの現代語を重視する視点が根強いためであり、ヨーロッパ社会の背景として圧倒的重要性を誇る古代ギリシア・ローマ文化の位置づけが欠落しているためである。

### 【医学英語の語源と語形成】

上記のことから本学の外国語教育改革の可能性を探った結果、2015年より新しい内容の英語科目を開設することとした。そして私が担当することとした。「医学英語の語源と語形成」を題目とする授業内容を多数のスライドに盛り込んで準備した。当然ながら題目は医学英語であるがその内容は、ギリシャ語系・ラテン語系の語源や語形成要素を多く含むことになった。私自身は古典語の専門家ではないので、著名な古典語学者に個人講習を依頼したことや、講習会に出席したこともあった。古代ギリシャ語については、文法の立ち入った学習をあきらめたことは致し方なかったが、綴字法や語形成とともに発音に不安を感じた。そこで日本人ではなくアテネの大学で古典語を専攻したギリシャ人の若い先生から直接、指導を受けた。私自身、新たな知識を学ぶ愉快さはあったが、その成果を学生に提供する喜びがあった。講義で取り扱った内容を示すために、期末試験で問うた設問の代表例を下に挙げる。

- 古代ギリシャにおける「十二指腸」の名称を書け（英語のアルファベットで）。
- 「十二指腸」の正式なラテン語名を書け。



- disease の語形成を説明せよ。
- atom および anatomy の tom の語源は何か？
- 「血友病」を意味する英語とその語形成を説明せよ。
- 「白血病」を意味する英語の語形成を説明せよ。
- 「狂犬病」を意味する rabies の本来の意味および hydrophobia の語形成を説明せよ。
- ギリシャ神話に由来する医学英語を3つ挙げて解説せよ。
- helicopter は語形成上、どこで区切ることができるか。次の3つから1つ選べ。heli-copter / helico-pter / helicop-ter
- lung はゲルマン語、ラテン語、ギリシャ語のいずれに由来を持つか。また語源的な意味は何か。
- 「クリニック」を表す clinic の意味をインドヨーロッパ祖語に遡った場合、何という意味の動詞に由来すると学説上考えられているか。
- 「膵臓」を意味する pancreas の本来の意味は何か。
- adrenal の語形成を説明せよ。
- 「乳房」を意味するギリシャ語系の語形成要素を使った具体例を挙げ、語形成を分析せよ。
- 「手」を意味するギリシャ語系、ラテン語系の語形成要素を使った英語をそれぞれ1つずつ書け。
- 「睾丸」を意味する英語の語源を説明せよ。
- 東京メトロの「メトロ」が、「子宮」を意味する metro- と語源的に同じである理由を説明せよ。
- 「陰茎」を意味する英語が「ペンダント」と同じ語源を持つ理由を説明せよ。
- rectum, rectangle, erect, right に共通する語形成上の意味を書け。
- cerebellum と cerebrum を語形成の観点で比較せよ。
- muscle で使われている指小辞と同じものを持つ英語を挙げよ。
- 「心筋」を表す myocardium の myo の語源は何か？
- autophagy の phag は何を意味するか。またこの要素を用いた臓器の英語名を書け。
- 「皮膚」を意味するギリシャ語とラテン語は何か？
- 病気あるいは病的状態を意味し -ism で終わる英語を2つ挙げよ。
- syndrome (症候群) の drome は古代ギリシャ語で何の意味か？



- immune の mune の語源は何か？
- pathogen の gen の綴りは何を意味するか？
- 「マラリア」の語源は何か？
- 「インフルエンザ」の本来の意味は何か？
- 「帝王切開」は英語で何というか？
- 「帝王切開」はドイツ語で何というか？
- 「帝王切開」の語源を、古代ローマにさかのぼって詳細に説明せよ。
- deficiency の fic はラテン語の何という動詞に由来するか？また、この動詞に由来する英語の例を2つ書け。
- introduce の duce はラテン語の何という動詞に由来するか？また、この動詞に由来する英語の例を2つ書け。
- university の vers はラテン語の何という動詞に由来するか？また、この動詞に由来する英語の例を2つ書け。
- section はラテン語の何という動詞に由来するか？
- suicide の sui の意味は何か？
- suicide の cide の意味は何か？また、cide はラテン語の何という動詞に由来するか？
- 肉のサーロインを意味する英語を書き、その語形成を説明せよ。
- relapse (再発) のラテン語の本来の意味は何か？
- candidate (候補者) の語源が「白い衣を身にまとった者」である理由は何か？
- 周産期内科を意味する英語の「周」を表す要素を英語で書け。
- 女性名ナタリーの由来は何か？医学英語の1例を挙げて説明せよ。
- dia- は through の意味であるが diagnosis においては何を意味するか？
- walk up と walk down の違いは何か？(空間的な上下関係以外の意味を説明すること。)
- 日本語の「代謝」の語義を平安時代以来の伝統的な意味と現代的な意味に分けて概説せよ。
- heterodox と orthodox の語形成を説明せよ (宗教的な意味も含めて述べること)。
- euthanasia の語形成を説明せよ。
- normovolemia の意味を書け。
- capital (首都) と cape (岬) は共通の語形成要素を持っている。その本来

の意味は何か。

- autopsy (死体解剖) の語形成要素に aut(o)- と -ops が含まれている理由を説明せよ。
- 「たんぽぽ」を意味する英語の語形成を説明せよ (フランス語および医学英語に言及すること)。
- 「外科」を表す英語を書き、その語形成を2つの要素に分けて説明せよ。さらに2つ目の要素を用いた英語の例を2つ挙げよ。
- 自転車の「ペダル」の英語と同じ語形成要素をもつ英語の例を3つ挙げよ。
- adrenaline はラテン語系の言葉である。同じ意味を持つギリシャ語系の英語を書け。
- 「コレステロール」を意味する英語を書き、その語形成を分析せよ。なぜ「コレ」という要素が入っているのかも説明すること。
- endorphin (エンドルフィン) の元の英語を書け。
- 「内因性」と「外因性」を英語で書け。
- 「皮下注射」(hypodermic injection) の略式名は何か?
- 「胃摘出手術」を英語で書け。
- ビフィズス菌の英語の由来をラテン語の bifidus にさかのぼって説明せよ。
- 現代の日本で日常用いられているカタカナ語でギリシャ語由来のものを5つ挙げよ。
- ギリシャ語由来の英語には、独特の綴りを持つものがある。独特な綴りを2種類挙げて、具体例とともに説明せよ。
- ギリシャ語の「人々」を意味する言葉を使った英語の例を2つ挙げよ。
- 古代ギリシャ人が想起していた愛・好の概念を表す3つの言葉は何か?
- 「欠席する」を意味する英語の語形成を分析せよ。
- 語形成要素 dextro- の反対語は何か。
- hypothesis の語形成を説明せよ。また thesis という要素を用いた科学英語の例を1つ挙げよ。
- dystrophy の語形成を説明せよ。
- anorexia nervosa の nervosa の品詞は何か?
- homeostasis の stasis は何という意味の動詞から来ているか?
- acquired (後天性) の反対語は何か?
- 中国医学においては、内臓全般を何と呼んだか?

- pig, cow は語源的には何語に由来するか？
- pork, beef は語源的には何語に由来するか？
- July と August の語源は何か？
- October の Oct- は8の意味なのに10月を意味する理由は何か？
- ギガバイト， テラバイトの giga と tera について， 古代ギリシャ語のそれぞれの意味を書け。
- Panta rhei の意味は何か？また， この言葉で有名な古代ギリシアの哲学者はだれか？
- Panta rhei の rhei と語源を共にする医学英語の例を2つ挙げよ。
- 「精液」を意味する英語が， 織田信長の時代に日本に設置された教育機関のポルトガル語名と語源が同じである理由を説明せよ。
- *The Oxford English Dictionary* の最大の特徴は何か？
- *The Oxford English Dictionary* の略号は何か？
- 編集主幹 Sir James Murray は初版全10巻が完成したとき存命だったか？

多くの学生が良い答案を提出し，「優」の評価を受けた。ほぼ満点に近い「秀」の評価を受ける者が毎回3名ほどいた。医学部の学生であれば当然知っていなければならない知識に不備がある学生は再試験を受けることになった。syndrome を syndrom とするなど，綴りの誤りは微細なものであっても当然ゼロ点とした。他方，「外科的処置 = surgery」について，その語形成を2つの要素に分けて説明させ，さらに後半の要素を用いた英語の例を2つ挙げさせる」という設問は一見，難しそうに見える。しかし講義を聞いていれば容易に答えられるはずだ。kheír (= 手) + érgon (= 仕事) で成り立っており，外科は「手を使った仕事」という意味に基づく。ergon から英語の energy や allergy が作られた。このように広がりのある知識を講義したが，まじめに講義を聞かず直前の準備で試験に臨んだ学生には歯が立たない問題も出した。また，ギリシャ語の「人々」を意味する言葉を使った英語の例を2つ挙げよ，という問題は，医学英語の epidemic, pandemic を構成するギリシャ語由来の dem が，民主主義を表す democracy の demo と同じであることについて問うものである。医学英語から古代ギリシャそして現代日本語への広がりに関心を向けさせる一つの試みであった。

医学用語には長い歴史の残滓が絡みついており，決して数学や物理学で用いる記号のように形態と意味の関係が自明ではない。リウマチを表す rheumatism

の語源的な意味はなぜ「流れる」なのか。インフルエンザを表す influenza がなぜイタリア語からもたらされた病名であるにもかかわらず英語の influence と「影響」という意味を共有しているのか。帝王切開を表す caesarean section はなぜローマの政治家ユリウス・カエサルの名前を含んでいるのか。このような質問に対して答えるためには、古い時代の学説や自然観、伝説や迷信に言及しなければならない。

### 【ヨーロッパの視野の中で見た英語】

ここで付け加えなければならないことがある。上記は当然ながら英語科目なので、あくまで英語の文脈の中で講義した内容である。そのために、イギリスやヨーロッパに関して私自身が長年、培ってきた言語文化の理解が試されることになった。当然ながらインド・ヨーロッパ祖語を源流とする諸言語を見渡す数千年の視野を持たねばならない。また、古代ギリシャ語・ラテン語とは異なるゲルマン諸語の系統も視野に置かなければならない。英語の骨格を成すものはゲルマン系のアングロサクソン語（いわゆる古英語）であること、また、中英語から近代英語へと発展する中で起きた歴史的事象を取り上げた。医学英語と直接関連は無いものの、重要な講義内容である。その概略は以下のとおりである。

第一に、英語の地理的な源をたどるとき「大ブリテン島」という答え——簡便な言い方では「英語の源は英国だ」という答え——が粗雑だということは学生には基本的な学習事項として学んでほしかった。英語が大陸からブリテン島へもたらされる前のケルト民族の存在は、学生にとっては目新しい知識だったようだ。そして子供時代に慣れ親しんでいたアーサー王の物語において円卓の騎士たちが（少なくとも伝説上）戦っていた相手は、大陸から渡って来て彼らの国土を侵略しようとしたサクソン族であり、まさに「英語」をもたらした「イギリス人」だったという事実も、医学部の学生には興味深かったようだ。また、マクドナルドの Mac は「息子（さらには子孫）」を表すケルト語だ、という知識は、歴史に目を向けることが逆に現代を新たな目で見える視点をもたらしてくれる。

現代のデンマークから北ドイツにわたる地域に居住していた部族が、いわゆるゲルマン民族の大移動の一環で大ブリテン島へやってきてブリトン族を追い出し、7つの王国を作った。そのことが英語史で一つの重要な出来事だったとすれば、もう一つの重要な出来事を忘れてはいけない。デーン人（いわゆるヴァイキング）の襲来である。8世紀末から11世紀半ばまでの数百年間、アングロサクソン

ン人たちがどれほど恐ろしい環境に置かれていたかということ想像することは英語学習とは何の関係もなさそうに見える。しかし、window, sister, they, などかなりの数の基本英単語が古ノルド語 (Old Norse) つまりデーン人が話していたスカンジナビア系言語に由来することを知れば、言語の発達の一場面 (この場合は異言語の語彙の流入) が、政治や軍事などの生々しい人間活動と深く関係していることに気づくことになる。ある日突然、異民族が海を越えてやってきて、沿岸の村や町を襲撃する。それが何度も繰り返される。略奪の被害を避けるために、異民族との交渉が行われる。ヴァイキングへの土地の移譲 (Danelaw), そして戦争を回避するために金銭 (Danegeld) が徴収され支払われたことはイギリス史では重要な知識であるが、英語史においては、異民族の語彙が英語に入って来たという意味で重要な知識である。しかしながら、「入って来た」というとりすました表現は、英語史研究家に任せておきたい。学生はもっと複合的な文化的、社会的、人間的な視点でこの歴史的事実を学んでくれたものと想像する。

政治的軍事的な出来事が言語の発達に大きな影響を与えるという意味で、英語史における決定的な最後の出来事は、アングロサクソン王朝が滅び、フランス語を話すノルマン王朝がイギリスを支配したことである。もっと直接的な事実に絞れば、王位をめぐる行われた西暦1066年10月14日の戦闘の中で、ハロルドの軍隊が、王位継承権を主張してノルマンディーから軍を進めてきたウィリアムに敗北したことである。私は戦闘が行われたヘイスティングズを訪れたことがある。そこに小一時間ほど佇み、たった一日の出来事を想像してみた。王が矢に当たって即死したとすれば、そのときイングランドの支配が、アングロサクソン語を話す王朝からフランス語を話す王朝へ変わったのである (Norman Conquest)。そしてこの軍事的な出来事が、その後の英語の発達を決定づけた。したがって結果から見れば、ハロルドが戦死した瞬間に、あるいはノルマンの一兵士が矢を放った瞬間に、アングロサクソン語 (Anglo-Saxon) から英語 (English) が芽吹いたのである。(英語学者の多くが Anglo-Saxon をしばしば Old English と呼び、その次の段階を Middle English 等と呼んで区別するが、これは粗雑で矛盾をはらんだ呼び名である。)

その後、何代にもわたってイングランド王たちはアングロサクソン語ではなくフランス語を話し続けた。宮廷をはじめ、法廷、学校、教会では三百年以上にわたってフランス語が話され、多くの公文書がフランス語で記述された。(このあたりの当時の事情については David Crystal の優れた解説がある [*The Stories*

[*Of English*, Allen Lane, 2004)]そして、一般庶民を構成するアングロサクソン人たちはアングロサクソン語を使い続け、ノルマン系の支配階層はフランス語を使い続ける、という言語的二重構造が社会の中に発生した。その中で、数百年の時間をかけて「融合」という作用が両者に働いた。次第にアングロサクソン語に多くのフランス語が取り込まれて語彙が豊かになり、文法や文構造も変化していく中で現代われわれが見ているような英語の形が整った。英語史では、この段階の英語を Middle English (中英語) と呼び年代を 1100-1500 ごろとしている。しかし、ノルマン人の支配が 1066 年に開始されたとしても、上記のような言語的二重構造が長く存在し続け、そこに社会階層の二層化が反映されているとすれば、1100 年の時点で Middle English がすでに一つの形をとっていたとは考えにくい。言語の変化には長い時間が必要であり、それを話す人間の社会も複合的に変化する。少なくとも前期に関する限り混在、接触、合体、融合の時期だったのではないだろうか。

### 【古フランス語とラテン語の影響】

考えてみれば、ノルマン王朝が用いていたノルマンフランス語、あるいは古フランス語は、俗化したラテン語を基盤としゲルマン語系のフランク語の影響を受けて発生した言語である。ノルマン人の源流は北欧でありゲルマン系であるが、フランス人との混血が行われたという点ではケルト系のガリアとも関係がある。このようにフランス語は、それ自体、複合的な発達の経緯を持っている。英語は、本来はドイツ語やオランダ語などと同様にゲルマン系言語に位置づけられるが、上記に述べた 1066 年以降の社会的構造変化の経緯と語彙の分布を見る限りでは混成言語と言えないこともない。そして興味深いことは、自らの言語フランク語を基本的には手放したフランク人が移動先の土着の俗ラテン語を受け入れてフランス語を発達させたのとは対照的に、英語の場合、大ブリテン島にやって来た外来の民族が自らの言語をそこに定着させ、さらにそこに到来した外来の王朝が自らの言語を土着の言語に融合させたことである。

### 【lung の語源をめぐって】

ゲルマン系、ラテン語系、ギリシャ語系の語彙をある程度相互に区別できることは、私が医学部の学生に期待することである。ゲルマン系とそれ以外のいわば外来語を区別する意味で、講義で必ず取り上げるのが lung の語源である。肺を

意味する英語の lung はもとはゲルマン語系 (lungen) であり、語源的には「軽い」を意味することは学習に値する。臓器としての肺は、その見た目の大きさに比べて重量が軽いことがその由来である。しかし、古代ギリシャから古代ローマに受け渡された医学の知識がラテン語を用いて体系づけられヨーロッパの各地の医師・医学研究者に浸透していった過程をよそめに、ゲルマン系の語彙として、あくまで日常語として残った lung の語源を紐解くことはおもしろい。また、一旦過去の語源へ目を向けたうえで、現代にもどることもおもしろい。方言あるいは肉屋の隠語で lights という言葉があるが、これは家畜の肺臓を意味する。現代英語で、文字通り「軽い」を意味する light と語源も語形も同類である。

### 【英語に関する知識の様々】

ゲルマン語、ギリシャ語、ラテン語、フランス語、そしてわき役の古ノルド語やケルト語も加わったオンパレードで繰り広げられる「英語」の舞台は壮観である。私は興奮の一部を学生と分かち合うことを望んで講義を行った。そしてそれはうまくいったと思う。しかしこの感動の共有は、知識の共有によって生まれたものである。このような言い方には少し注釈が必要だ。「興奮」や「感動」は上から下へ働きかけるものなのかどうか。もしもそのように見るならば、そこには重力の助けを借りてハンマーを上から下へ打ち下ろすような一方的な安易さがある。そのような見方は、おそらく生徒を下に見ていることから来るのだろう。熱血先生の「熱」は熱ければ熱いほど下に沈んで冷え込んでいく。私は単純で、人類が生み出して後世に残してくれた知識の遺産を共有するだけでよいと思う。学生の前に立つ教師は、学生の上ではなく同じ位置から共にこの知識の遺産を見上げることでその役目の多くは果たされると考える。そしてそのことを可能にするためには、教師はたえず勉強し、学生の前に知識の遺産を差し出す力を磨かなければならない。実際、日本医科大学の担当授業では、各学期末の試験で、上記のような内容の記述問題を出してきたが、ほぼ完璧な答案を提出する学生が毎年数名いた。「よくできました。マル、合格。」という評価ではなく、「ヨーロッパ2千5百年の知識がよく共有されている」と、私は学生を評価する。そして知識が共有されていることは、知識を共有する感動も共有されていることも期待できる。私は答案の余白にメモされた学生の感想でそれを感じ取ることができた。



### 【近代科学の始まりと科学用語】

ここまでギリシャ語、ラテン語、ゲルマン語の系統に照らした語源・語形成を述べてきたが、実際のところ、現代の医学あるいはさらに広く科学において用いられている英語の専門用語は、ほとんどが近代に作られたものだと言える。しかしもっと正確に言えば、2つの系統をたどることができる。

第一に、古代においてすでに獲得されていた科学的概念および用語が、近代になって英語として確定したり、新たな意味を伴って開花した言葉の系統。「膵臓」を表す *pancreas* は古代においてギリシャ語で作られたが、ほぼそのままの形で歴史的に残り、のちに英語として確定したものである。また、古代において概念としては獲得されていたものの、近代科学の発展の過程で新たな意味が吹き込まれた *atom* や *ether* のような言葉がある。

第二に、近代以降、新しく獲得された概念を表すに際し、ギリシャ語系あるいはラテン語系の要素を用いて形成された言葉の系統がある。(haemophilia, sublingual immunotherapy, etc.)。新たに発見された科学的概念に用語を与えるにあたって、学術の世界でいわば共通語として伝統的に用いられてきたギリシャ語系・ラテン語系の言葉あるいは語形成要素を用いて造語が行われた。すでに学術的抽象概念を表すための言語的体系を持っていたラテン語の役割は大きい。日常の手あかまみれた土着語(アングロサクソン語系の語彙)を避けたという意味もある。近代日本において西洋から移入された科学用語に訳語を与えるにあたって、やまとことばではなく、漢字を用いたことと似ている。

### 【中高における英語教育】

こんなことをここで強調する必要はないかもしれないが、医学部で前述のような科目を担当する立場から中学校や高校を見ると、そこで教えられている英語は知識の規格品だと言える。学習指導要領に基づく授業では、学習すべき知識・技能は細かく項目分けされており、区分された知識の集積は学習内容という人工物として生徒に提供される。生徒はそのルールの上を懸命に走っている限り、一定の成果はあがる。実際、一定の効果は上がっている。日本語とは文法体系も語彙も発音も異なる外国語を生徒に教えることは一大事業であり、冠詞のはたらきや構文、*r* と *l* の音の違いを説明するのは並大抵の仕事ではない。

しかし、規格品の限界は、規格に対応していないものを処理できないという点である。教室でそれを感じる機会がよくある。例えば、なぜ *character*, *keep*,

car に含まれる [k] の発音がそれぞれ ch, k, c という異なる文字で綴られるのか。これは中高生にとって自然な疑問だろう。しかし、答えられる教師は少ないようだ。私が学生に中高での経験を尋ねると、驚くことに何人かの学生が次のようなことを語ってくれる。教師に素朴な疑問を投げかけると、疑問への回答ではなく、次のような言葉が返ってきたとのことである。「それは私にはわからない。しかしそんなことは考えなくてよい。」すなわち、まさに目の前に見えている綴りに潜むギリシャ語、古英語、フランス語の由来などは学校で教える英語指導の項目には含まれないからだろう。そんなことに係わっているのは英語の授業は進まないし、入試の準備にもならない。they が英語本来の語彙ではなく古ノルド語に属していること、さらにヴァイキングの生々しい侵略の歴史まで語る必要はない。しかし、教師が前述したような規格品としての英語知識の集積しか持ちえないとすれば、生徒もそのようなものとしてしか英語を見ないだろう。この傾向が大学へも押し寄せてきていることを私は危惧する。そして長い大学勤務の中でそのような傾向に流された末、ようやく現在のような認識に到達し、その実現が本学で可能になったことを幸運に思う。

多くの大学で「TOEFL 対策」などという授業科目を正規のカリキュラムで教えている。しかも英語科専任教員の担当である。私の考えでは、ジムのインストラクターのような役目を持ったアシスタントが大学の片隅の語学訓練センターなどで行うことだと思う。あらゆる教師は前述のような「知識の遺産」の継承者であるはずだ。そのような意識を持てば、授業に潤いと豊かさが生まれるに違いない。

### 【近代日本の始まりと外国語学習の意義】

ここで少し話を戻し、江戸時代から明治時代への転換の時期に、医学の世界に何が起きたか、特に医学知識の習得形態にどのような変化が起きたかを少し垣間見てみよう。端的に言えば、明治の初年以降、医学を志す者にとっては外国語との格闘が絶対に避けて通れない試練になったのである。しかもそれは、日本語とは語彙も文法体系も大きく異なる言語であった。

もちろん江戸時代、儒学、特に朱子学が学問の本流と定められる中で、蘭学は一部の学徒や学者の大きな関心を集めていた。そして西洋医学の知識に触れて和洋の水準の差を目の当たりにした者は、出島のオランダ商館という窓口を通してヨーロッパから知識を得ようとした。そしてオランダ語という言語の学習に取り

組まなければならなかった。

明治になってすぐにオランダ語がドイツ語に取って代わったことは前述の通りである。ドイツ語をはじめとするヨーロッパの言語を学習する必要性は、明治初期の国家的な方針転換が大きな引き金になっている。特に医学に関しては、明治初期に劇的な転換が起きた。それは、医師の資格制度などなかった時代、つまり武士身分である典医など世襲の医者を除けば医師養成の教育制度も整備されていなかった時代の終末に起きた転換である。まだ戊辰戦争の煙も消えない明治元年に樹立された明治新政府は、次のような布告を公布して、医学のあるべき姿を打ち出している。

医師之儀、人之性命ニ関係シ、実ニ容易ナラザル職ニ候 然ルニ近世不学  
無術ノ徒、猥リニ方薬ヲ弄シ生命ヲ誤リ候者、往々少ナカラズヤニ相イ聞ク

帝国議会という立法府ができるまであと22年を待たなければならなかった当時としては、この「太政官布告」は一定の法的機能を持っていた。俄作りの政府が早くも明治元年において、旧幕藩体制における旧習を反省し、新しい国家体制における医学・医療のあるべき姿を打ち出したことに驚異の念を感じざるを得ない。そして上記の布告に続いて次々と、西洋医学に基づく医療の制度や医師の養成のための方策が打ち出された。医師の資格制度は必須であるとの認識のもとに「医術開業試験」が開始されるまであとわずか7年であった。そしてそれにいち早く呼応するように、2年後の明治9年に開設されたのが本学の前身、済生学舎である。

西洋医学に舵を切った以上、ヨーロッパの言語で書かれた医学の原書を読まなければ始まらない。そして日本の医師・医学研究者たちは、主にドイツ語の原書から医学知識を読み取ろうとしたが、そのとき行われたのが外国語から日本語への翻訳の作業である。西洋の知識を学び、国内に取り込もうとするときに、自国の言語に適切に「訳する」という作業を大がかりに行った国は、当時のアジアの中では日本が唯一である。自国の言葉に置き換えたり、適当な日本語がない場合には造語して目的を達した。ふさわしい言葉が見当たらないために新しい漢語を考案した例としてしばしば「哲学」(← philosophy) が挙げられるが、医学においては、「血友病」のような医学用語が多く生み出された。外国語とともに日本語との格闘も求められた。すでに述べた通り「割腹切開術」→「皇帝切開術」→「帝

王切開」と推移し、医学用語として定着するまでのプロセスは西洋医学の知識だけでなく言語との取り組みの歴史を物語っている。

なお、上記のような文脈における明治元年という年の重要性は、おそらく政治的な意味での重要性である。つまり、江戸時代の後期においてすでに、優秀な学徒・学者たちが西洋に対して目を大きく見開いていたのである。しかもそれは医学の実践的な知識に限らず、その背景にある優れた自然科学の知識、さらには古代ギリシャから積み重ねられてきたヨーロッパの学問と道徳の遺産に対しても鋭く反応する目であった。

そのような目を持っていた一人に幕末の蘭学医緒方洪庵がいた。彼はドイツの医師フーフェラントの著書をオランダ語訳で入手し、それを日本語に訳した。その中で説かれている医師の心掛け12条は、『扶氏医戒の略』として明治時代の医学を志す人々の精神的な指針となり、そこに打ち出された思想は本学の学是「克己殉公」のもとになっている（日本医科大学医史学教育研究会、「フーフェラントの「医戒」と済生学舎の建学の精神について」、『日本医史学雑誌』第57巻第2号、p. 183）。学是に表現されている高邁な思想は、本学の学是として定められた大正期はもちろん緒方洪庵の生きていた武士の世にさかのぼっても激烈にすぎないように思われるが、まずは、「医戒」の対応する部分を引用しよう。

医の世に生活するは人の為のみ、おのれがためにあらずということをおのれの本旨とす。安逸を思はず、名利を顧みず、唯おのれをすてて人を救はんことを希ふべし。人の生命を保全し、人の疾病を復治し、人の患苦を寛解するの外他事あるものにあらず。

医師は、自分の安逸や利得を顧みず人を救うことを第一とすべきだ、という教えがここでは誰の目にも簡明に表現されている。「多事あるものにあらず」という決然とした言葉は、学是に込められた厳粛さに直結しているように思われる。ところが、ドイツ語の原文と比較してみると、おそらく緒方洪庵があえて訳しなかった個所が浮かび上ってくる。

Leben für andere, nicht für sich. Das ist das Wesen seines Berufs. Nicht allein Ruhe, Vortheile, Bequemlichkeiten und Annehmlichkeiten des Lebens, sondern Gesundheit und Leben selbst, ja, was mehr als dies

Alles ist, Ehre und Ruhm, muss er dem höchsten Zwecke, Rettung des Lebens und des Gesundheit Anderer, aufopfern. (Christoph Wilhelm Hufeland, *Enchiridion Medicum*)

ドイツ語の直訳はここではあえてしないが、簡単に内容の組み立てを記すと、上記の引用箇所は、「人の生命と健康を救うために、AだけでなくBも、さらにはCさえも捧げなければならない」とある。A = Ruhe, Vortheile, Bequemlichkeiten und Annehmlichkeiten des Lebens (安逸, 利益, 安楽, 生活の便宜) であり, B = Gesundheit und Leben selbst (自らの健康と生命) である。問題はCの部分である。緒方洪庵の訳ではさらに「名利を顧みず」とあるが、原文ではCに最大の重みが置かれている。フーフェラントは、AとBに続けてさらに何を捧げるべきだと言うのか。それは、Ehre und Ruhm (栄誉と名声) だと言うのである。自分の利益や安楽を後回しにして人のために尽くすことまでは目標として目指すことはできるかもしれないが、自分の栄誉名声さえも後回しにできるかどうか。物質的なものではない分、不可能ではなさそうに見えるが、現実の場面を思い描いてみると、非常に難しいように思われる。

そこで私が考えるのは、江戸時代の末期、多くの医師が武士身分であり、あるいは町医者であっても時代柄、武士道的な精神が浸透していた社会にあっては、名誉が最後の精神的支柱であったという点である。名誉を失いたくない、面目を保ちたい、あるいは名を後世に残したい、そしてそれが保たれさえすれば、命を失ってもかまわない、という武士道的な生き方に照らせば、フーフェラントの「名誉名声さえも」という過酷な要求は受け入れがたいのではないか。ドイツ語原文にはあって「医戒」の中に訳出されていない箇所つまり "ja, was mehr als dies Alles ist, Ehre und Ruhm" (「そうだ、これらすべてのものよりもさらに重要なもの、栄誉と名声も」) は、どうしても武士の身分であった医師緒方洪庵には受け入れがたかったのではないだろうか。(もちろん緒方洪庵が参照したオランダ語訳が問題になるのだが、オランダ語でもドイツ語原文と変わらないことを私は確認した。) 他方、ヨーロッパの文化的、社会的、あるいは宗教的伝統を受け継ぐフーフェラントの、医師の高邁な目標を達成するのならば他のあらゆるものを無に帰しても厭わないような過酷な精神は、日本には浸透しなかった、と考えることもできるのではないか。そして、最も重要な精神が退けられたまま、実際の知識や教訓だけが都合よく受け入れられたのであるならば、まだまだ、

ヨーロッパから多くの学ぶべきことが残っていると思われる。

ここで以上の内容を外国語の重要性に引き当てて結論付けたい。ヨーロッパの知識を理解するためには日本語への翻訳は有効であるが、その背景にある精神を取りこぼすことなく理解するためには原書に直接あたって言語を緻密に吟味することが重要だと思われる。

私は最後の学年の定期試験で、上記のドイツ語の一節を暗唱させる試験を課した。知識の暗記ではなく、原文の暗唱には、反復訓練が必要である。スポーツや音楽の演奏などで求められる「体で覚える」という試練が重要である。このことについては、残念ながら本学在任中に十分なことはできなかった。しかし、学生に贈るメッセージとして授業中に何度もその大切さを説いたつもりである。私自身は、上記のドイツ語をすべて暗唱しており、時々、駅で電車を待っているときの中途半端な時間などに小声で口ずさんだりする。医者という主語を別の職業に置き換えて読むこともできるので、これはすべての人のための言葉だということができる。

### 3. 古い過去の記憶をたどる

#### 【医学研究者との接点：小学生の頃】

医学の専門家ではない私はこの10年間、医学部に身を置いていたわけである。しかし現在のことをしばらく措いて、古い記憶をたどってみると、意外にも私と医学者とのいくつかの偶然の接点が思い起こされる。

その一つは、子供時代に遡る。近隣に「服部さん」という人がいて、母が非常に親しくしている人だった。我が家では「服部さん」という名前をよく聞いたので、しばしば家内で話題になったことや、行き来がよくあったことは確かだ。福岡市の郊外ではあまり見かけないような気品のある40歳くらいの奥さんだったことを記憶している。ご主人については九州大学医学部の助教授ということ聞いていたが、あるとき金沢の大学へ教授で迎えられることになり引っ越しの準備に忙しくされていた。当時、私は小学6年生だったはずだ（年表を参照すると教授着任が昭和44年4月となっているため。）その引っ越し準備の最中に母に連れられてご自宅に伺ったが、そのうち子供ながらにゴソゴソと屋敷内を探検したくなりついにはご主人の書斎へ入りこんでしまった。書棚には和洋の医学書が重厚な趣の書棚に収まっていた。誰もいないことを良いことに私は何気なくその分厚

い一冊を手にとって開いた。そこには奇怪な病気の症例を映した白黒写真がたくさん掲載されていて、子供の目にはすこしショックだったことを覚えている。その後、金沢から達筆で書かれた奥様の手紙が何度か届き、母はそれを見せてくれたり話題にしたことを記憶しているので、よほど親しかったことと思う。金沢大学教授となられたご主人とは一度もお会いすることはなかったが、血液学の権威で、白血病に対する骨髄移植療法の開発に貢献された服部絢一教授ということの後で知った。それを知ったのは、教授の書齋にゴソゴソ入りこんだ日から何十年もあとのことだった。

### 【中学から高校へ】

中学時代について、私の現在の学問的関心との関連で思い出すことは、ほぼ毎日音楽に没入していたということだ。自宅ではバロック音楽（ルクレール、テレマン、アルビノーニなど）にまずは沈み込んだ。音源は主にNHK-FM「バロック音楽のたのしみ」であった。皆川達夫の解説は、ヨーロッパの音楽芸術に関する高度な知識を精度の高いふるいにかけて提供してくれるものであり、単に音楽への導入という意味以上のものがあつた。最高の芸術に触れているという実感があり、中学生の私は強く引き込まれた。この番組は記録を調べてみると1965年～1985年とあるから、比較的初期の放送に接していたことになる。図書館から幾度も借り出して読んだ『大音楽家の肖像と生涯』（音楽之友社）が手引書となった。特段に編者・執筆者の見識が示されていたのかどうか思い出せないが、地味な文章で堅実にまとめられておりこの種のものでは解説書の古典だと思う。

香椎中学ではブラスバンドでトロンボーンを吹く一方、独学で楽曲の分析や作曲技法を勉強した。私は叶わなかったが、環境が整うならば、そして音楽の道へ本気で進むのならば、一般的な指針としては、早い時期に優れた教師について勉強すべきだと思う。学校には馬頭徹夫という音楽の先生が、吹奏楽では有名な博多第二中学から赴任してこられ、ブラスバンド部の顧問として優れた指導してくれた。着任した直後の最初の授業で「馬頭という名前は、ふるくは黒田藩に仕える武家の家系に受け継がれた名前であり、殿様の毒見の役を代々、仰せついていた。私がいま生きているのは、殿様に毒が盛られることが無かったからだ」という冗談交じりの自己紹介をして生徒たちを笑わせた。音楽家にありがちな神経質なところは無く、人間的にも潤いと深みがあつた。音楽の先生というだけで



なく作曲家としても知られており、その代表作は時折各地で演奏されていたようだ。私が作曲したどうしようもなくバロックじみた曲を見て顔をしかめた先生は少し修正の提案をしてくれたが、県内の中学のコンクールに出して入賞したのはわれながら不思議である。香椎中学は福岡市の郊外に位置していたが、歴史的には博多の旧市街の外側に位置し、博多湾を望む雰囲気の良い地域だった。生徒も先生たちものびやかだった。ノーベル医学生理学賞を受賞した大隅良典博士が10年前に通っていた頃はもっとのどかだっただろう。

私の音楽志向は次第にバロックからはなれ、バッハからブラームス、マーラー、リヒャルト・シュトラウス、さらにオネゲルまでへと進んだが、高校へ進学する頃は文学の方へ関心が移っていった。

### 【近現代詩を読む】

高校時代になって日本の近現代詩を読み始めた。伊東静雄、三好達治に始まり、那珂太郎、田村隆一、蔵原伸二郎などを含めて現代詩をあれこれ読んだが、もっとも共感したのは金子光晴である。代表作「灯台」「落下傘」「おっとせい」などの中に、鬱屈した高校時代の気分と重なるものを感じた。この作品は1930年代の軍国主義的な時代背景の知識を織り込みながら読むと、その重い雰囲気と絶望的な孤独感が伝わってくる。しかし私自身これから何かを切り開いて行かなければならないという現実の課題に向き合い始めたとき、その詩行は沈黙し始めた。それがまた語り始めたのは後年になってである。

メタファーが持つ強烈な威力は動かしがたかった。メタファーは詩の世界へ入るための切符である。当時、この詩人は高齢ながらご存命だったが、なにやら愉快に過ごされているように見うけられた。詩人が影響を受けたアルチュール・ランボオの短い生涯と比較しながら少し不思議な気持ちになった。そして思ったのは、この詩人にとって決定的だったのは青年期に大正デモクラシーを経験したことではないか、ということである。現状への反発が自由への渴望を原動力としているとすれば、金子光晴は、その自由を一度経験した詩人だ。それが無い人は何を求め何に抗うのだろうか。しかしやみくもに自由を求めて福岡から高知、京都さらに東京へと移住してきた私が、後年、東京で、金子光晴が住んでいた町、吉祥寺に住むことになるとは！

福岡高校では、「現代国語」と「古文」担当の山本哲也という先生の授業を受けた。実は、先生という呼び方は、私の心になじまない言葉だ。私の中では、詩

人山本哲也であった。私の思い出の中で「詩人でもあった教師」として生き続けている。また、何かを「教えられた」という認識とともに思い出せるほぼ唯一の教師である。その授業は、そこに漂う張り詰めた感覚や、生徒の中に食い込んでくる言語の「起爆性」という点で独特だった。当時、興味が音楽から文学へ移りはじめ、図書館で片っ端から現代日本詩人の詩集を読んでいた私にとって、学校の授業が教育課程という形式を超えて本当に何かを教えてくれる、という実感を持った数少ない授業であった。

この詩人＝教師は1962年に第3回現代詩手帖賞を受賞しており、すでに数冊の詩集を出していた。(今は多くの作品を現代詩文庫『山本哲也詩集』[思潮社、2006年]で読むことができる。以下引用する詩はこの詩集に収載されている。)

授業で取り扱ったものとして覚えているのは、芭蕉の紀行文、萩原朔太郎をはじめとする近現代詩、小林秀雄の批評文、安部公房の「詩人の生涯」などである。『野ざらし紀行』の「汝が性のつたなきをなけ」を論じるあの甲高い声が今でも聞こえるようだ。

その授業が目指していたのは、読む、読む、ただひたすら読む、ということに尽きる。「いかに読むか」と言った方法論によるのではなく、テキストに頭と体をぶちつけるといった読み方で、その向こうにあるものが見えてくるまで読み込む、という、まるで太古の人間が芭蕉の紀行文を前にしたらこんな読み方をするのではないか、と思われるような真正面からの読み方だった。頭の端っこでとがりながら読みたがる評論家・研究者の読み方とは違っていった。詩人にとって「存在そのものが矢印」なのだとすれば、読むということは、テキストの中に記された不可視の矢印の先を探る試みだと言える。(「存在そのものが矢印」は詩集『一篇の詩を書いてしまうと』の同名の詩より)。そのために教室で何が行われたかという、質問の機関銃射撃だ。そして、生徒が死んでいるのか生きているのかをたしかめるかのように、ひとりひとり生徒を名指ししていった。テキストの一節からある語句を取り上げてその意味やニュアンスを問う質問だったが、その多くは即座には答えられない難しいものだった。名前を呼ばれた生徒が無言でいると次の生徒へ、また次の生徒へと狙い撃ちしていった。熱心な生徒は、先生から冷ややかにスルーされたくないで、「あーっと、この箇所は…」とか「そのお、芭蕉は…えっと…」などと言って、何か答えようという意志表示をしたものだった。たどたどしい回答でも先生は耳を傾けた。示された回答から新たな視点を引き出し、「読み」を展開することもあった。しかし、不注意や慢心に基づく回答

に対しては手厳しい論評を加えた。山本哲也の授業を受けたことのある生徒ならば二つの決まり文句をきっと覚えているだろう。「でしょうか?」と「ご冗談でしょう!」である。

あるとき、同級生の一人が一冊の詩集を私に見せた。それは先生が貸してくれたもので、誰にも言わないようにという口止め付きで渡された、とのことだった。なぜ彼に貸す?—という若干の嫉妬とともに、あえて口止めをやぶる彼を訝しく思った。しかし彼は先生の授業に熱心に誠意をもって臨む生徒として際立っていたので、先生の意図は推し量れた。その詩集を手にとってパラパラとめくった私の目に、一篇の詩の最初の数行が目にとまった。それは、

ひとつの事実をひとつのことばで  
いいあわせると信じている者よ  
さようなら。

というものだった。その3行はあまりに印象的で、先生の作品に触れた最初だったためか私は即座に記憶しその後も忘れることはなかった。特に「さようなら」という言葉のそっけなくも決然とした響きが、教室で先生の発する言葉の鋭い語調につながっているように思われた。(後年、それは『夜の旅』という詩集の同名の詩だということを確認した。)

先生は、教師の軸から突如、詩人の軸に飛び移ることがあった。そして詩人の軸は、峻厳な極であった。ある日の出来事を今でも覚えている。テキストの読みが教室中が没頭している中で、ある生徒が先生の解釈を突っぱねるような態度を取り始めた。ここではO君としておこう。本人に悪気はなく、日常でもしばしばそんな態度をとる生徒だったが、先生は厳しく反応した。口論は、授業終了のベルが鳴った後に再燃した。先生は教卓からO君のところまで行き隣の席に座って至近距離から言葉の射撃を始めた。O君も負けてはいない。そのうち彼は、「それは自明のことです」と先生の論拠があたかも無価値であるように否定して反論した。もうだめだ。国語教師を追い払って言語の野原に自足させることはできるかもしれないが、詩人はだめだ。詩人の背後にはいつも言語の極地がある。それを詩人はしばしば空隙としてとらえる。それは「よるべのないくらがりの空洞」であるがゆえに「遠い未来にたどりつく自由」をもつ「喉」であったり(「声」『夜の旅』)、言葉ではふさぐことのできない「隙間」だったりする(「黒い大きな家」

(30)

『一篇の詩を書いてしまうと』。詩人は連呼する—

電話してください

電話してください

しかしどこへ？だれへ？という問いかけに

不明の裂け目に電話してください

「ゲーム 8」『連禱騒々』

と答える。それでも詩人は「あらたな絶望にむかって」出かけるのだ—

事実とことばの細く長い間隙から

あらゆる形を拒みつづける空の廃墟へ。

「夜の旅」

振り返っていま目に浮かぶのは、教師と生徒の間で行われる言葉の応酬合戦を  
気遣っていたクラスの皆の様子だ。皆は各自、席から腰を上げ、二人の様子を遠  
巻きに見ながら教室から退出していった。その後その「事件」について論評した  
り話題にしたりするものは誰もいなかった。しかし私の中でふと浮かんだO君に  
対する「よせばいいのに、ちえっ」という感慨は、心が見えないどこかにチュ  
ーインガムのようにぺたりとくっついたままだった。しかしその後、私は次のよ  
うな詩人の言葉に出会った。

だからいわないこっちゃない

一篇の詩を書いてしまうと

一篇の詩の死臭によって嘲笑され

またぞろ、あらたな悪意によって

いきのびるよりほかない

「一篇の詩を書いてしまうと」

二十年もたってから「いきのびるほかない」と書いた詩人はまた、次のような

修辭疑問を投げかける—

存在しないものとして生きてきた者に、どうしてこれ以上帰るところがありません

「人質」

ついには、「倒れながらけれど倒れずに / にいつ、とわらってやること」を唱える（「2010年の記念写真」）。(以上3編は『一篇の詩を書いてしまうと』より。)

私が卒業してしばらくのち、先生は学校を退職して福岡の小さな大学で教えることになった。新しく敷かれた管理体制になじめなかったのが退職の理由だと聞いたが詳しいことは知らない。ある日、なんの脈絡か覚えていないが授業中、自分の子供時代のことをふと話された。子供の頃は病弱で、「今年もこの子は冬を越せるだろうか」と親からつぶやかれるほどだった、と。頑健な体つきではなかったが、すくなくとも授業中は元気がみなぎっているように見えた。体の中に細くはあるが鋼のようなものが入っているのではとさえ思った。1937年生まれなので当時は三十代後半だったはずだ。その後、詩人、批評家、大学教授として、長く仕事を続けられた。

### 【講演会の思い出】

高校時代以降、十代から二十代にかけて、著名な作家などの講演会があると機会を見つけて足を運んだ。特に思い出す名前は丸谷オ一(小説家)、安岡章太郎(小説家)、早乙女貢(歴史小説家)、山本健吉(評論家)、会田雄次(学者)、村松剛(評論家)、芥川也寸志(作曲家)、黛敏郎(作曲家)、田辺茂一(紀伊国屋書店創業者)、犬養孝(万葉学者)、ドナルド・キーン(日本文学研究者)などである。講演の内容よりもむしろ独特の物腰、口調、そして興味深い言い回しがいつまでも記憶に残っている。たとえば丸谷オ一氏は、舞台の上手に姿を現したのちカンカンと大きな靴音を鳴らして演壇へ勢いよく歩いて行く所作が印象的であった。どちらかというところボソボソとしゃべる傾向を持つ多くの文人とは異なり、この作家は力強く張りのある声で語った。そのユーモアたっぷりの弁舌はおそらくイギリス文化から、特に修辭を重んじる英文学から学んだものかもしれない。芥川也寸志氏は、自分はどんなメロディーを聞いても、それがもともと世界のどこに由来するのか言い当てることのできる、という趣旨のことを述べられた。講演者の中

で特に印象的だったのは、当時、ソ連から三十五年ぶりに帰国したばかりの女優岡田嘉子である。予定時間よりもずっと早く話が終わり、時間を持って余した様子で会場に向かって、何か質問があればお答えいたします、とおそるおそる申し出るという異例の講演会であった。

日頃親しんでいる著作とは別に、著者自身から生の声を聴くことには特別な趣がある。著作は死後も残るが、生の声を直接聞く機会は、当然ながらご存命の間だけである。たとえば歌舞伎役者の舞台をじかに見る機会を持つことができるのは同時代人だけだ。機会を逃したらそれまでである。昔の作家には文人の雰囲気 が漂っていたように思う。それは著作から読み取れないものである。

### 【学部から大学院へ】

大学進学で選んだのは英文科であった。西南学院大学文学部では詩人の有田忠郎教授がフランス文学を教えていた。すでに小林秀雄などの評論や翻訳を通して私はフランス文学に少しは親しんでいたため、あえて大学ではなじみの薄い英文学を専攻することにした。中世文学の黒瀬保教授が教えておられた。際立った業績と独特の雰囲気を持つ、文字通りの学者だった。中世英文学における運命の女神の研究に何十年も取り組まれていた。六十歳の還暦を迎える頃に文学博士号を授与され、研究の集大成である *Goddess Fortune and John Lydgate's Works* (Sanseido, 198) を出版された頃である。現代は、日本の学位授与制度が大きく変わり、課程を修了して論文審査を受けたのち早ければ三十歳頃に博士号を取得できるが、当時、文学博士号は一つの学問の達成であり、学問的業績の長年の蓄積を経た著名な教授でも六十歳前後で授与されることが多かった。

前述の研究書では、John Lydgate (c. 1370-c. 1451) の *The Fall of Princes* に描かれた Goddess Fortune の気まぐれや人間の有為転変の寓話的、図像的特徴が分析されている。特に興味深いのは女神が操る車輪だ。本の扉に十数ページにわたって挿入されている図版は見物である。車輪の上に乗る人間たちは、高い地位にある者も低い地位にある者も運命の女神の気まぐれによる回転で一瞬にして上昇や転落を被ることになり、その様子がある種の滑稽さで描かれている。これは日本の思想や図像表現と照らし合わせてみるときわめて異質な雰囲気を漂わせており、学問的探求心をもってこの中に入っていけるかどうかの中世英文学の道を選ぶかどうか、そして一生の仕事にできるかどうかの分かれ道になる。大きな覚悟が必要だ。黒瀬教授はその道を選び、学問的生涯をそれに捧げた。おごり高

ぶる成功者、転落した高位高官、不幸な境遇に押しつぶされる貧者、幸運を手に入れて躍進する者、等々をめぐる人生の有為転変はどの国でもどの時代でも起こって来た。また、いつでも起こり得ることであり、運命の女神の寓意には深遠な普遍性がある。そこに黒瀬教授は引き込まれたのだろうし、ときどき個人的な感慨を吐露されていた。自分とともにこの方面の研究に入りたい学生がいれば「読めるようにしてあげます」とおっしゃったが、それは後継者を持ちたいというニュアンスだった。しかし例えば次のような古式の綴字で発音も現代英語とは異なる中世の文献を紐解くことを一生の仕事をするには単なる「覚悟のいる選択」以上のものが必要だろう。

An hundred handis she hadde on ech part  
 In sondri wise hir giftes to depart.  
 Summe off hir handis lefft up men aloffte  
 To hih estat of worldli dignite,  
 Another hand griped ful vnsoffte,  
 Which cast another in gret aduersite:

*The Fall of Princes*, VI. 34-39

(前掲 *Goddess Fortune and John Lydgate's Works* より)

彼女の体の両側には百本の手がついていたが、  
 それは贈り物をさまざまな方法で配るためであった。  
 ある手を使って人々を引き上げ  
 世俗の高い地位へ昇らせるかとおもえば  
 また別の手を使って人々をぐっとつかみ  
 逆境に陥れるのであった。

訳：崎村耕二

古代ローマにおける運命の概念、ポエティウスによる神学的な意義付け、中世の異教的イメージのキリスト教的変容などに関する学識と知見そして中世英語の読解力は、それが養われるまで何十年が費やされたのか気が遠くなるようであった。運命の女神の研究をほとんど極めた頃なのだろうか黒瀬教授はある日、これから（中世英文学における）「あの世」の研究を始めたい、とおっしゃった。



(34)

それ以来一度を除いて教授には会わないままとなった。のちに Howard Rollin Patch による *The Other World* の翻訳書を出版されたことを知った。

### 【アメリカ人の二人の教師】

西南学院大学で教えていた教員のうち二人の先生のことを鮮明に記憶している。アメリカ人の先生が多かったのは、プロテスタント系の大学だったので、宣教師としての役割を担って日本にやってきたということと関係していた。その一人が、コールマン先生 (Wilma Anita Coleman) だった。英作文を担当していた。「丁寧さの度合い」と関連してあるとき先生は黒板に、

Open the door.

から

Could you open the door for me please?

までいくつかの依頼文を列挙し、これらすべての文は同じ意味です、とそっけなく言い、みんなの顔を眺め渡した。「同じ意味だって？表現が違うじゃないか」と私は思った。そして、先生はアメリカ人だから表現の相違とそれぞれのニュアンスなどに無頓着なことを言うのだ、と思った。いつか読んだヘミングウェイの『老人と海』の淡白な文体を思い出した。それからすぐに、先生の真意はもっと複雑なのだろうと思った。相違と類似が同時に存在するという一種のパラドックスを指摘したのだとも考えられた。日本の文化とアメリカの文化の相違を身をもって経験しながらも、相違を越えて存在する人間性の普遍性のようなものを視野に入れた発言だったのかもしれない。

コールマン先生についてはもう一つ思い出がある。ある日、附属図書館で本を探していたとき、書架の後ろの方からとても品のある丁寧な日本語が聞こえてきた。司書の人と話している声だ。はっとしてふり向くとそれはコールマン先生だった。アメリカ人の先生方は、教室では英語しか話さなかったもので、そんな「うつくしい」日本語を話す人がいるなど思ってもみなかった。日本人以上によく日本語を話す、もっと正確に言えば、日本人以上に日本語の響きや言い回しを大切に話す外国人が存在することは確かなのだ。アメリカ人やイギリス人以上にき

れいな英語を話す人がいても不思議ではないのと同様だ。

もう一人、記憶に残るアメリカ人の先生がいた。ホートン先生だ (Frederick Mast Horton)。「文学としての聖書」という私にはほとんど在り得ない題目の講義を担当していた。先生は、その授業を特別に真剣な気持ちで担当していたようには見えなかった。というのも先生は、英文科所属の教授ではあったが、英語学や英文学の専門家ではなさそうに見えたからである。むしろ熱心なクリスチャンとしての面が表に出ていたように思う。そしてその信仰は日常の物腰や言葉の中で学生への信頼や愛情として現れていたと思う。それは返却されたレポートの余白に書き込まれたコメントで感じられた。日本の大学全般に言えることだが日本人の教員がレポートに詳しい講評を付けて返してくれることはまれだ。レポートを返却さえしてもらえない、という愚痴を現在の大学生から耳にすることがある。(私は自分の担当講義では、期末試験の答案に対する講評をメールで学生に知らせることにしている。) だからホートン先生の手書きのコメントを見たとき、その“Excellent interpretation!” などと言う評価の言葉よりも、コメントをくれたこと自体に心が弾んだ。一番記憶に残っているのは、一度、お腹をこわして授業を欠席した後に、提出が遅れたレポートを先生の研究室まで持って行ったことだ。和英辞典で gastritis という言葉を見つけた私は、欠席の理由を述べてレポートを渡した。後日返却されたレポートの余白には「いらいらしながら食事をしてはいけない」というコメントが記されていた (もちろん英語で書かれていたが正確な文言は思い出せない)。胃炎の原因をイライラして食事する行為に帰することには、少し意外さを感じたが、コメントの中身がどうであれ、そこに潜む気遣いの気持ちがありがたかった。その後、ホートン先生について思い出すことはなかったが、最近そのお名前を何かの記事で見かける機会があった。アフガニスタンで医療活動に従事していたペシャワールの中村哲氏は、私にとって学校の先輩でもあったが、あの痛ましい銃撃事件で亡くなったあと、その経歴が紹介される中でわかったのは、香住ヶ丘の教会で中村哲氏にバプテスマを授けたのがホートン先生だったということだった。

### 【大学院：大江三郎教授の演習】

学部卒業後、九州大学大学院文学研究科へ進んだ私は大江三郎教授の演習を受講した。それは現在へつながら私の英語への関心に大きな影響を与えたものだった。大江教授は「文学作品の語学的研究」という演習を担当し始めた頃で、テ

クストは Randolph Quirk, “Charles Dickens, Linguist” (in *The Linguist and the English Language*, Edward Arnold, 1974) だった。クワーク教授はいかにもイギリスの英語学者らしく理論に嵌り込まない闊達な語り口で英語を論じ、*The Use of English* などの一連の著書を出版していたが、デイヴィッド・ヒュームの言う「言語の力を知るのはそれを使うことにおいてである」という趣旨を、具体的な作品例で示してくれたのが、先の論文である。さらに次の学期でも大江教授は同じクワーク教授の “Shakespeare and the English Language” (前掲書所収) をテキストにした。私の関心は英語の豊かな語彙・表現・文体へ引き寄せられた。

私は語用論が専門ではなく「英語学者」として「弟子」になるつもりもなかったが、形式上の主任教授として先生が推薦状を書いてくださり、修士課程修了と同時に高知大学へ赴任することが決まった。そこで三月にご自宅へご挨拶に伺った。沈黙がちになったのは、私がそもそも無口だったことに加えて先生も無口だったためか、先生が私に対して心を開いていなかったためなのかわからない。しかし帰るときに、駅まで歩いて送ってくださる、と聞いて恐縮した。やはり沈黙がちで駅まで一緒に歩いたが、ふと意外に思ったのは、先生が鼻歌を歌っていたらしゃったことである。そして、電車に乗り遅れないようにと、先生が小走りになったのを覚えている。それまでの緊張が少しほぐれた気持ちになった。二年ほどのち五十代半ばで亡くなったのは残念なことだった。

#### 4. 読書経験と研究志向について

##### 【現在につながる読書経験】

学生時代の英文学講読経験は、大学課程のテキストと個人的読書を含めて、シェイクスピアの代表作、ダン、ミルトン、ワーズワース、キーツ、シェリー、コールリッジなどの数百篇の詩から近現代の散文に及んだが、すべては、あくまで過去の読書経験にすぎない。読書の実りは、ほかのあらゆる経験と同様に、今過ぎて行くこの瞬間に発生し消滅するものだ。

しばしば、回想録などに若き日の読書経験が書かれており、そこからいかに多くの糧を得たかといったニュアンスを読み取ることができる。しかし、読書に関して言えば、他の多くの実体験と同様に、それ自体に価値があるかどうかかわからない。若い頃、こんな良い本に出合ったので今の(立派な)自分があるといったニュアンスは、学生時代こんな立派な先生に習ったので、弟子である自分も立派

なのだといった「虎の威」のニュアンスと重なって見える。もちろん何の読書経験もない、というのは論外であるが、あくまで読書経験がいま現実にどう生きているか、という問題が重要だ。そう考えると、正直なところ、私の場合は、私自身の糧になるとともに毒にもなったという甘くも苦い追憶の思いを抜きにして多くの読書経験を語るができない。それは私が凡庸な人間だということの証明なのかもしれない。

谷川俊太郎の詩『生きる』では、「生きているということ それは…」の形で生の様態が次々と語られており、私には一行一行が強く心に響く。

生きているということ  
 いま生きているということ  
 それはのどがかわくということ  
 木もれ陽がまぶしいということ  
 ふっと或るメロディを思い出すということ

そして

いまぶらんこがゆれていること  
 いまいまがすぎてゆくこと

谷川俊太郎『生きる』（福音館書店、2017年）

まさにその通りだ。この瞬間のこの生だ。この短い詩は「生きるとは何か」という命題に関する哲学者の論考よりも明らかに「生」を指し示してくれる。過去の生は過ぎ去ったものであり、もう存在しない。しかし、「ふっと或るメロディーを思い出すこと」（5行目）も「生きていること」だと言えるのなら、読書体験に関しても、ふっと或る本のある一節を思い出すことの中に「いまいまがすぎてゆく」ものとしての「生」が存在するとも言えるだろう。

大学入学後、ひと夏をかけて T. S. エリオットの *The Waste Land*（『荒地』）を福田陸太郎の注解で読んだ。文学の「荒野」に行くことはあってもいいのかもしれないがこの無謀な経験は今から考えると一つの徒労に見える。そのほか、気がむくままに英文学の作品を読んだのだが、大学の外での私の関心はイギリスという国や、英語で書かれた文学に限るものではなく、フランス文学、ドイツ文

学，ヨーロッパの思想と歴史，そして翻って日本の古典文学，近現代文学にも向かった。

それは、一部の教授たちには奇妙なもの、あるいは注意散漫・軽率という意味で忌むべきものと見えたかもしれないが、私は頓着しなかった。『万葉集』『古事記』『古今集』『平家物語』『方丈記』『徒然草』『太平記』などを岩波書店や小学館の全集で読んだのも学部時代である。鈴木三重吉の『古事記物語』を小学生のときにすでに読んでいたが、岩波の日本古典文学大系で読む『古事記』の原文は初めて読むものであった。冒頭の国生みの話から始まる神代の霞が次第に晴れてゆき、<sup>ひとよ</sup>人代の時代に移ると眼前に古代の西日本の風景がのどかに広がっているような気がした。全編読破したのち、思ったほど読みづらいものではないことにわれながら驚いた。712年に編纂された当時の日本語は、英語で言えば古英語（アングロサクソン語）の叙事詩『ベオウルフ』に相当する。おそらく、当時すでに中英語（1100年頃-1500年頃）やシェイクスピアの原文を読んで培った外国語の読解力が日本の古典に対しても働いたのだろうと思う。

それとほぼ並行してゲーテの『ファウスト』は、レクラム文庫を片方に置き森鷗外、高橋義孝、手塚富雄などの名訳を並べて比較しながら読んだ。フランス詩への興味については後述するが、英文学への興味と合わせてフランス文学・思想への愛着はこれまで長く細く続いている。哲学者アランの著作、特に幸福、教育、文学、芸術に関するプロポ集は、その後、これらの話題を考える基盤となった。右手に原書を置いてフランス語をちらちら横目で確認しながら翻訳を読む、という手法をとった。

### 【フランス詩を読む】

学生時代の一時期圧倒的だったのは、すでに高校時代から翻訳で親しんでいたフランス詩、特にアルチュール・ランボーだ。原文で読み始めるうち、火事の炎のように降り注いだのはそのフランス語の響き、そして優れた日本語の訳詩だ。『ランボーの生涯』（A. H. マタラッソー、P. プティフィス、粟津則雄訳、筑摩書房、1972）と小林秀雄の評論は炎に油を注いだ。その「火災」が数年間で収まったのちは、暗唱していた原詩をときどき口ずさんだりする程度だったが、最近、詩集を取り出して“Sensation”を再読する機会があった。そして、語と音と意味の完べきな連合を、あらためてただすなおに楽しみ、この若き天才を、そのあるべき位置に押し戻して読む自分に驚いた。

Par les soirs bleus d'été, j'irai dans les sentiers,  
 Picoté par les blés, fouler l'herbe menue:  
 Rêveur, j'en sentirai la fraîcheur à mes pieds.  
 Je laisserai le vent baigner ma tête nue.

Je ne parlerai pas, je ne penserai rien:  
 Mais l'amour infini me montera dans l'âme,  
 Et j'irai loin, bien loin, comme un bohémien,  
 Par la Nature, —heureux comme avec une femme.

夏の青い夕暮れ ぼくは小道をゆこう、  
 麦の穂に刺され 細草を踏しめながら。  
 夢みるように 足にはひんやりさわやかな感触。  
 帽子もかぶらず 風が頭を洗うにまかせよう。

ものも言わず 頭は空<sup>から</sup>っぽにして。  
 けれど限りない愛が心に湧きあがるだろう、  
 そして遠くへ ずっと遠くへゆくんだ ボヘミアンのように、  
 自然のなかを——女と一緒にいるように 幸せな気持ちで。

(訳：崎村耕二)

あるべき位置に押し戻す、と言えるのは、二十歳の頃、詩を読む私の視点がドン・キホーテ的に揺らいでいたと今は自覚できるからである。

当時は見えていなかったものが今ははっきりと見える。まず、時制が浮かび上がる。上の詩では未来形がポイントである（「小道を行こう」、「感じるだろう」、等々）。この詩では、なにも行われてもいず、完了してもいない。そして少年は、女と一緒にいるように幸せな気持ちで自然の中をはるか遠くへ行こう、と言うが、今、現に遠くへ行っているわけもなく、女はそばにいないし具体的な女でもない。「ぼく」は la fraîcheur を「感じるだろう」とは言っているが、その「感覚」は実在してはいないものとして未来形で語られる。「ひんやりする」のは、詩の中で言われている la fraîcheur という言葉そのものの作用だ。愛が「湧きあがる」でもなく「湧きあがった」でもない。語られているのは、「愛が心に湧きあがる

だろう」という未来への思いなのである。目の前にあるのは、フランス語の言葉の組み立ての上に成り立つ語義と音声の作用すべてだ。自然だけの世界に「ほく」がおり、その「ほく」が「ほく」のことを語っているのがこの詩だ。それがここで言う sensation の若々しく見事な表現だ。そしてそのようなものとして私は今この詩を読んで楽しんでいる。

後期の「曙」（“Aube”）と題する詩では、対照的に、複合過去が使われており、すべては終わったものとして語られている。詩は「私は曙を抱いた」で始まり、最後には「その大きな体を少し感じた」とあるが、すべては、目覚めてもう真昼だと気づいた瞬間に消え去ってしまう。主語にも注目したい。「私は…私は…私は」と続くのはランボーだけの特徴ではないが、「曙」では「私」がおり他に「人間」はおらず、あとは物を言わない自然である。少年は「髪を振り乱した金髪の滝」に笑いかけ、「一輪の花がその名を告げて来た」と言うが、笑いかける「人」はおらず、語りかけてくる「人」もいない。それが若い頃この詩を夢中で暗記しながら受けた圧迫の原因でもあったのだが、私の中であるべき場所に押し戻されたこの詩を、今はただきれいな詩だだけ思う。

さてそれでは例えばボードレールの詩は、若い時に夢中で読まれる詩なのかどうか。「港」（“Le Port”）と題する散文詩は、先に述べたような意味合いで、そのあるべき位置において読むと、むしろ老年になって読む詩だとも思われる。「人生の戦いに疲れた者」（“une âme fatiguée des luttes de la vie”）にとって港から見る空や雲や海の光景は、すばらしいプリズムとなって人の目を限りなく楽しませてくれる、と詩人は言う。港から船出した帰り来る人々を眺めることは「ある種の不思議で貴族的な喜び」（“une sorte de plaisir mystérieux et aristocratique”）となる。「意欲する力をまだ持ち合わせている人々（“ceux qui ont encore la force de vouloir”）」——こんな視点で人々を見ることが若い時代にできるとも思えない。

英文学の勉強の路線はそのまま続いたのだが、そして英文学研究者のにぎやかな集まりからは遠く離れて行く中で、フランス語のすぐれた詩行は、心の片隅で細くも強い糸となって現在までつながっている。そして日本人、というよりも日本語の文学的感覚は、フランス文学に強く反応するように思われる、

クロ（Guy-Charles Cros, 1879-1956）は私が後年になってフランス語で読み始めた詩人である。次の詩は、私の世代ならばウイスキーのCMで耳にした人がいるだろう。

なんじら みすぼら えま  
 爾等の見窄しい繪馬の前に、  
 なんでこの身が、額ぬかづき祈ぬからう  
 むしろ、われは大風たいふうの中を闊歩して  
 轟つぐみき騒ぐ胸を勵まし  
 鶉つぐみ鳴く葡萄園ぶどう園に導みちきたい。

『上田敏全訳詩集』(岩波書店, 1983) 所収

これは上田敏の名訳詩集『牧羊神』にある「せんご謔語」と題する詩で、原詩“*Délire*”は *Les Fêtes Quotidiennes* の冒頭に置かれている。「新しき美をわれは求める」という第一行目は詩人としての一つの宣言となっている。モーツァルト、ラファエル、ベートーベン、シェイクスピア、マルク・オオレルをお前たちは守れ、なんでわたしがみすぼらしい「ぬか繪馬」の前に額ぬかづいたりしようか。「古書こしょに傍註ぼうちゅうしてこれを汚す者」によって偉人達は復活するのではない。「このわが身み中ちゆう」そして「わが血液よみがえに 甦うへる」のだ。「墓の上に遠慮無く舞踏」し、「敢えて異端の道を撰」ぶのはなぜか。それは結末の2行で示される。「全世界の美、われにとりては、朝毎、朝毎に、新しいからだ」。冒頭の語句「われらは新しい美を求める」(“*Nous voulons la beauté nouvelle*”)とはつまり「世界の美しさ」(“*la beauté du monde*”)そのものが新しく立ち現れることだ。「余白を汚す者」(“*Salisseurs de marges*”)とは全世界の美に対して朝毎に心が開かれていない凡庸な研究者、論評家のことだ。フランスの哲学者アランの言葉を借りれば「美にまともりつく凡庸」である。不遜な言い方をしているように見える一方、これほどすがすがしく決然と新しい美を求める宣言を私は知らない。創作者としての詩人だけでなく読み手にとっても共有できる感興が打ち出されている。そしてその感興は、「むしろ、われは大風の中を闊歩して」や「沖の汐風に胸開くとも」という詩行の中にうつくしく表現される。

『牧羊神』に収載されているクロの詩でもう一つ好きなものがある。原詩に題名はなく、「世間のある人々には」で始まるその詩は、慣例にしたがってその日その日の「用事」を済ませていく人々への皮肉を述べる。人々にとって、「生いのちはごく手軽な造作も無い尋常一様の事」である——

la vie est chose simple  
 chose facile et de tous les jours



「荒っぽい大きな歡樂（よろこび）」（“les grandes joies barbares”）を避けていけば「大きな悲哀」（“les grandes douleurs”）もやって来ないのだ。彼らは「ゆくてを塞ぐ邪魔な石」を廻って通る「蟾蜍」<sup>ひきがえる</sup>にたとえられる。「しかし、君」と詩人は呼びかける。「本当に生きてみたい」（“pour que tu vives”）と望むのならば「其日其日に新しい力」を出して「荒れ狂ふ生」に打ち克たなければならぬ。そして詩人は祈る、「君の生は愛の一念であれ」と――

Toi, il faut que ta vie soit un acte d'amour

これはほとんど宗教的な祈りであるが、この詩全体には教義めいた主張も説教もない。この詩自体が、「余白を汚す者」を拒否しているように見える。

この詩集の古い原書が手元にある。クロの自筆の献呈の言葉が Juin 1912 という日付とともに書き込まれており、当時活躍していた美術評論家 Olivier Hourcade 宛てになっている。1912年は第一次世界大戦が始まる2年前。クロは私が生まれる前の年1956年に亡くなっている。この四十数年間に世界で何が起きたかを考えてクロの生涯を思うばかりである。

訳詩集『海潮音』と『牧羊神』は、それ自体が詩作品であり、訳者の上田敏は詩の翻訳という仕事の価値を最高に高めた人である。英文学の教授ではあったが、その全業績を見ると、驚くほどの学識をもって和洋の文学を総覧した人だということがわかる。同時に、詩人の感性をもって日本語と格闘した人だ。当時まだ若く特段に著名な詩人でもなかったギ・シャルル・クロ（今でもしばしば著名な父親シャルル・クロと混同される息子のクロ）の数編の詩に上田敏はどのようにして出合ったのかは不明だ（のちにクロの訳詩を試みた堀口大学は上田敏に影響を受けたのかもしれない）。しかし個別の文学というよりも、文学そのものに心が開かれている、という意味で明治・大正期のこの英文科教授が同時に文人であったことがうかがえる。ある一つの研究テーマに専念することは専門家としては当然だが、文学を専門にするのであれば、例えば上田敏のようなタイプをモデルにすることもあり得ると思う。しかし現代の学会や大学勤務の在り方はそれを許容しないように思われる。半面、大きな研究テーマを見出して一生をささげる覚悟ができた黒瀬保教授のような人も少なくなっているのではないか。

**【研究者、学者、文学者そして人間性】**

さて、ランボーからクロにいたる私の乏しいフランス文学遍歴は、あわせて金子光晴や小林秀雄などフランス文学の影響を受けた文学者やフランス哲学者アランなどを読み込む中で、細く続いてきた。現在は、暗記しているフランス語の詩を時々、諳んじて楽しんでいる。イギリスの詩についても同様だ。暗唱するという習慣は、学校で習う知識の暗記とは異なり、咀嚼・反復・反芻の楽しさを含んでいる。私は教育においても暗唱を重視すべきだと思うが、イギリス詩の研究者を名乗る人で、シェイクスピアやシェリーやワーズワースの有名な一節も暗唱できない人に会おうとがっかりしてしまう。学生もあまりそのような「稽古」を楽しまない傾向があり、訓練も受けていないようだ。生活の中であれやこれやの韻文や散文に触れながら文学趣味を育んで行く、という経験を経ないまま英文学科に入学し大学の教育課程の中で受講科目としての作品講読に入って行くとするれば残念なことだ。2023年現代においても、一流大学で「英文学」を専攻する学生と話していて感じることもある。たとえば「シェイクスピアの劇におけるジェンダー」を卒業研究のテーマにしている、と聞くと、すぐに作品中の有名なセリフのいくつかでも英語で暗唱できるかどうか試してみる。まったく一行も暗唱できない人ばかりで、私は失望するとともに、指導教授の「指導ぶり」を思う。大学の英文科では一般の文学趣味とは何か全く別の事が起きて来た。これが戦後の一時期盛況を誇った大学の英文学科が近年衰退し、反面「国際」や「コミュニケーション」という言葉が学生を引き付けるキーワードになった理由だと思われる。

昔 C. S. ルイスが嘆いたように、“Reader Meets Text”つまり読者が作品に出合い原文に直接触れて、いわば体で読む、というプロセスが欠落しているのである (C. S. Lewis, *An Experiment in Criticism*, Cambridge UP, 1961, p. 129)。ルイスは、イギリスでの状況を念頭においているのだが、日本の状況に置いてみればなおさら当てはまることだ。大学院へ進んで研究を始めても、感性（センス）を養えるかどうかは別問題だ。それは日々の生活の中での、中間に何も介在させない読者と作品との出会いから生まれる。さらには日常の「なじむ」という環境の中で培われる。ある作家や作品について即座に知識や理論を披露することができても、読みの助けになるような見識を示すことができない研究者がいる。

感性や品性、さらに人間性は文学とは別問題だと言えるのかどうかかわからないが、先に触れた黒瀬保教授や後で述べるケアリー教授のような研究者を思い起こせば、学問的厳格さを持ちながらも、文学から受けたであろう品性や人間の深み

を有する人々と有しない人々が歴然と存在する理由を、研究者の方々には、まさに得意の研究アプローチで解明していただきたい——と医学部の英語教員にすぎない私などは思う次第である。

## 5. 出会った人々

### 【イギリスでの在外研究】

複数の大学での助手、講師、助教授、教授へと積み重なる勤務経験は書き始めるときりが無いし語る価値も無いので、ここでは自分にとって大きな経験と言えるものをいくつか記してみよう。それは私自身ではなく、私が出会った人々のことを記すという意味で価値があると思われる。1991年に文部省在外研究員（若手枠）としてイギリスへ行くことになったが、そこで出会った人々のことは強烈な記憶として残っている。

### 【イギリスで出会った人々（1）：一人の英語教師】

オックスフォードの市内からバスでサマタウンを通りさらに行けば緑広がるキドリントンにたどり着く。イギリスに到着してすぐそこに居を構えることになった。同時に、英語の個人レッスンを受けたかったので、サマタウンの掲示板に出ていた個人広告を見て電話した。電話の向こうの人は、Mainwaring というその人の名前をメインウェアリングと発音した私に「マナリングと発音するんだ」とやさしく訂正した。その人にほぼ毎週、個人レッスンを受けることになった。個人レッスンと言っても特段に教科書を使うようなものではなく、その時々で自由に会話をする形で進めることで合意した。しかし初回で彼は二つのことで私を驚かせた。

一つは、1回のレッスン料を固定的に決めていなかったことだ。1回10ポンドから料金の交渉をスタートさせよう、というのである。すでに私はロバート・リンド（Robert Lynd）の随想集でイギリスには昔そのような習慣があったことを知っており、その習慣には多分にイギリスの階級意識が関係していたことを察していたが、1991年当時にも実際に行われていたことに驚いた。具体的なレッスン内容についてこちらから条件を示して料金案を提示することが求められるのだ。それについて10ポンドからせり上げるのかせり下げるのか決めかねた私は、慣れないことに戸惑った。同時に、探るような眼で投げかけられた「あなたの父

親はどんな職業ですか」という一見、場違いな質問にも当惑したが、社会的背景の情報を引き出しながら人物を鑑定する方法は、これもまた小説で学んだイギリス上流社会の一面を表している、と思った。私は君たちイギリス人が嫌いなアメリカ文化の影響下に戦後教育を受けた日本人だ、という思いを弾みにして、私は「10ポンドをお願いします」と言い切った。彼は、なんの抵抗もなく、合意した。

もう一つ驚いたのは、ノートに「絶対使ってはいけない英語」を書き取らせたことだ。それは、many, very, nice, wonderfulといった日常よく使われる言葉であった。このような英語を使う者は言語感覚が鈍く要するに愚かな人間だというのである。たとえば very という強調の言葉は、どの程度の度合いを表しているのか具体的な言葉で言い換えよ、many は具体的な数値あるいは a number of で置き換えよ、というのである。私がうっかりこれらの言葉を使おうものなら、人差し指を立てて注意した。発音にも厳しく、彼に指摘されて初めて私は自分の h の発音は正しい英語の音ではないということを知った。彼の考える「正しい発音」ができるまで何度も言い直しをさせられた。

これらの訓練に関して私は今でも彼に感謝している。ただし、それは英語教師としてよりもむしろ英語に対する異常なまでの思い入れを見せてくれた珍しい存在としてである。彼は、「自分は言葉の芸術家である」とも言った。あるとき、甥の男の子が訪ねて来た。その子が使った Yeah という英語を「おい、ここはオックスフォードだぞ」と言って Yes に訂正させた。もっとも、私は、彼自身が Yeah という言葉を使ったのを耳にしたことがある。彼は、数冊の著書をすでに出版していることを明かし、そのうちの1冊（小説）の結末の英文を満足気に朗読してみせた。過去にアルゼンチン滞在経験があり、パタゴニア紀行も出版していた。定職に就かず作家として成功することを夢見て執筆に専念していたようだが、あるとき有名な人気作家の名前を私が口にした瞬間、「私の前でその名前を言うな」と激昂した。父親はもと英国海軍提督。オックスフォード大学マートンコレッジで法律専攻。ある種のプライドを心に秘めながらも社会的な成功の階段を型どおりに上がることを拒んでいた——あるいはそれができなかった。その後、作家として花を咲かせることなく亡くなったことを兄弟からの手紙で知った。

**【イギリスで出会った人々 (2) : Sir Raymond Hoffenberg】**

先に挙げた医学研究者との接点と合わせてもう一人、特筆すべき医学研究者の思い出がある。その方は、英国王立内科医協会会長 (Royal College of Physicians) や国際内分泌学会会長 (International Society for Endocrinology) を歴任されたレイモンド・ホフエンバーク卿 (Sir Raymond Hoffenberg) である。私がお会いしたときは、オックスフォード大学ウルフソン・コレッジ学寮長 (President of Wolfson College, Oxford) だった。正式にコレッジでの受け入れが決まった私は、まず手続きに関する説明を学寮長秘書から受けた。その女性の話す英語は発音の面でも言い回しの面でも美しく、「英語はこんなに美しい言葉だったのか」と感嘆した。それは、少なくとも音声的な響きの点ではフランス語が最も美しいと単純に信じていた私にとって、自分が関わってきた英語という言葉の見方を大きく変えるほどの経験であった。もちろん、ある言語が別の言語に比べて本質的により美しい、ということはありません。しかし「発話」という行為には、ひとりひとりの身体、性格、人格、感性、さらには教養が作用している。「英語」という抽象的な存在はない。英語はひとりひとりの発話者の中で美しくもあり醜くもある。その後も一度として彼女の英語ほど、ハッとして聞き入るような英語を聞いたことはない。

さて、その秘書から、学寮長に面会する日取りを告げられた。それは2月の非常に寒い日の午前9時だった。再び秘書に迎えられた私は、握手しようとして手を差し伸べた。彼女は私の手を握った瞬間、悲鳴をあげて手をひっこめた。寒い中、手袋をせずに歩いてきたので私の手は氷のように冷たくなっていたのだ。これはイギリス滞在中、自分で自覚しないことで人に無作法を働いた一例である。無作法の多くは、悪意でもなく悪態でもなく無自覚や不注意からくるものである。イギリスでは多くの人々と出会う中で、知識や頭脳の活動とは別のところで動いているもの、つまり態度、物腰、作法、言葉づかいなどの作用を強く感じる機会があったが、それは、言語も文化も異なる外国で特に顕著に表れるものかもしれない。ところが、そんな異文化や異言語という文脈を超えた強烈な経験が、前述の秘書との「氷の握手事件」の直後に訪れた。

学寮長室は秘書室の隣にあった。ドアをノックして入るとそこはかなり広い部屋であった。ソファーに腰を掛けていたのが学寮長ホフエンバーク氏だった。彼は待ち構えていたようにドアの方を向いていたので、私はドアを開けた瞬間に対面することになった。

私は、瞬間、蛇に見込まれた蛙のようになった。それは彼の態度、物腰、話し方、そしてなによりも威厳のある顔であった。人相とか面相とか面構えといった言葉では表すことができない、一つの作品のような顔であった。また、少し言葉を交わした後に、優れた医学研究者であるとともに文学などにも深く親しんでいる教養豊かな方であることがわかり、これにもびっくりした。

少なくとも当時は、例えば日本の大企業の重役について、ビジネスの話のほかにはゴルフの話しかできない、という苦言を海外から聞かされていたし、研究テーマに関しては偏執的に高度な論文を書くことのできる外国文学研究者について、日本の文化などに関しては薄っぺらな関心や知識しかないのに海外から訪問客があると慌てて（一度も自分では見たことのない）歌舞伎に連れて行くなどという滑稽な事例を私は目にしていた。

ホッフエンバーク氏は、長身でハンサムだということに加えて、身体の趣に張り詰めた威厳があった。私は即座にこれは武士の趣だと思った。日本では残念ながら見たことのないサムライに、イギリスで出会ったのだから驚くほかない。

前述のとおり、ホッフエンバーク氏は、著名な医学研究者として数々の要職に就いた方である。なかでも会長を6年にわたり務めた英国王立内科医協会は16世紀初頭に遡る古い伝統を持ち、医師の教育や資格認定、医療スタンダードの設定などに関して国際的にも重要視されている。また、母国である南アフリカ共和国でアパルトヘイト反対運動に深く関与したことから迫害を受けイギリスに移住することになった等の経歴も含めて、その人生経験は鋼のような意志と鋭い観察眼をもたらしたに違いない。面談のときに感じ取ったものは、そのほんの断片だったに違いない。しかしそれは強烈な印象だった。

その後も何度かお会いする機会があったが、堅い皮に守られた果実が内部に柔らかな果肉を含んでいるように、内面には人間味があふれていた。日本人でサムライを気取る人たちが、気負っていたり、厳しかったり、高慢だったりするのは全く異質であった。2007年に亡くなったとき、各誌の死亡記事ではその人となりで紹介されたが、内科医として診療にあたっていた頃、誰もがこぞって先生に診てもらいたいと願ったとのことである。

### 【イギリスで出会った人々 (3) : 二・二六事件に遭遇した外交官】

これまでに強烈な印象を受けた人物が日本人ではなかったことは偶然の不運だったかもしれない。それが海外、特にイギリスの人々であったことは、偶然の

幸運だったかもしれない。あるいは私の限られた経験や観点による必然の幸運または不運だったのかもしれない。しかしなおも何人かの人々を挙げなければならない。

バースを訪れたときのことだ。雰囲気の良いホテルのレストランに入り、広々とした芝生に置かれた白いテーブルに座って家族でアフタヌーンティーを飲んでいた。私は最初気づかなかったが隣のテーブルには老夫婦がおり、しばらくして奥様の方が、バギーに乗った1歳半の娘に話しかけてきた。そのうちにご主人の方が話に加わり会話が始まった。かなり高齢に見えたが、風格があり立派な体格の温厚な紳士だった。

話の中身をすべて覚えてはいないが、その内容の一部は、ひょっとしたら歴史に残すべきものかもしれない。その人からもらった名刺を手に取り、Tomlinsonという名前を確認のため発音すると、その人は「きみは私の名前を正しく発音した初めての日本人だ」と言って私を驚かせた。そのうちに、自分は戦前、外交官として日本に勤務していたこと、赴任するため日本に到着したその日に二・二六事件が起きたこと、などを語り始めたので一層、私は驚いた。のちに1994年10月の『インディペンデント誌』の死亡記事で確認したところ、このトムリンソンさんの日本勤務は1935年から五年間、任地は東京のほか神戸、横浜となっている。国内の他の領事館から東京へ配属された当日が1936年の二・二六事件だったというのが事実で、日本に着いたその日、というのは私の聞き間違いだろう。

芸者についても何かを言ったが、詳しいことは聞けなかった。そのうちに、大東亜戦争の話になった。もちろん日本はアメリカだけでなくイギリスとも交戦しており、シンガポール、マレー半島、ビルマが戦場になったことは私も知っていたが、トムリンソンさんは日本を離れたあとの赴任地で戦争に巻き込まれたようだった。前述の死亡記事によれば、サイゴンに転勤となったのち大東亜戦争がはじまり、日本軍に10か月間拘束されたとのことである。

特に日本人の親しい知人のことを懐かしそうに語った。それは領事館で親しくしていた日本の武官のことだ（名前をマツモトと言ったようだが確かではない）。なんと、トムリンソンさんがサイゴンで日本軍に拘束されたとき、その方面の担当部局にその日本人がたまたま赴任していたのだ。身柄を日本軍に引き渡される時、偶然にもお互いの姿を認めた。イギリス側関係者の中にトムリンソンさんを見出したとき、その日本人武官はいたたまれず涙を流しながら彼を見送った。



トムリンソンさんはその五十年ほど前の出来事を感じまったように語った。隣にいた奥様は、その話を、初めて聞くことであるかのように聞いていた。

うっかり私が（なにも知りはないのに）ワインの話を持ち出すと、「おっ、ワインか？ワインのことならここできみと議論を始めようか」と挑まれたので、私はへなへなとなった。知ったかぶりをするものではない。相手は世界を外交官として立ち回り、貴族や政治家たちをワインでもてなした人だ。

後で我に返ると二時間も話しをしていたことに気づいた。私がトムリンソンさんに会ったのはその一度限りだった。日本に帰国後、時候の挨拶状を交わしたが、間もなくして亡くなったことを知った。

それから、あの控え目な感じの奥様のことも覚えている。もともとイギリス人であったが、子供のときにオーストラリアに移住。映画、芝居、ラジオ放送で活躍したのち外交官となり、のちにクラーク・ゲブルそっくりのトムリンソンさんと出会って結婚した。自らの外交官としてのキャリアを退き、世界中を駆け回る著名な外交官の妻となったこの人の旧姓は Nancy Gleeson-White である。この名前は、忘れ去られているかもしれないが、オーストラリアの演劇史の端っこに小さな名前を残している人だ。子役として1939年製作の *Seven Little Australians* に出演した記録が残っている。女優時代の若い時代の写真と紹介記事も最近見にする機会があった。

ご主人はナイト爵に叙されていたのでお二人の名前は Sir Stanley Tomlinson と Lady Nancy Tomlinson である。

#### 【イギリスで出会った人々（4）：オックスフォード大学ケアリー教授】

在外研究なので滞在中の本務は当然、英文学の研究である。文部省の審査を受けて在外研究員としての渡英が認められたのは幸運だったが、さらに幸運だったのは、ジョン・ケアリー教授（Professor John Carey）が受け入れを承認してくれたことである。当時、世界の英文学研究では最高峰に身を置く人であったことは、ケアリー教授を「高みを行くもの」という意味の「ハイペリオン」と呼んだ記事を目にしたことからわかった。十月の下旬、かなり寒くなり始めた頃、マートンコレッジの守衛に訪問の旨を告げると、教授の部屋を教えてくれた。マートンストリートに面する建物（Old Warden's Lodgings）の、外に窓が張り出した二階の部屋が外から見えた。階段には、靴が少し沈み込むほどの厚い絨毯が敷かれていた。私の研究計画、というよりも私の全般的な関心や、イギリス小

説に関する見解をしばらく聞いていた教授は「興味深い。これより定期的にここへ来てはどうだろう。質問などがあれば答えてあげよう」とおっしゃった。私は教授の提案に感じ入ったが、相手は「高みを行く人」だ。オックスフォード大学教授としてだけでなくタイムズ日曜版 (*The Sunday Times*) に定期的に書評を載せていて多くの人々に恐れられている文芸批評家だ。私は自分が凡庸な学徒に過ぎない、と自覚していた。しかし、まさにその自覚こそが、立場の違いを超えて私が教授とともに、いわば「文学歓談」を交わす心理的な環境を整えてくれたに違いない。学位取得という学務上の目的もなく新進気鋭の挑戦的な研究者でもなく、何か面白そうな若者が日本からやって来た、少し様子を見てやろう、という思惑だったとすれば私の気持ちは楽になる。ケアリー教授は在学生だけでなく外部の研究者にも私的に指導を行うことがまれにあったらしく、このような指導のことを private tutorial と呼ぶということの後年になって知った。私は、チャールズ・ディケンズの作品やその社会背景等に関する質問を携えて、定期的に教授の研究室を訪ねた。生真面目な質問が多かったが教授は丁寧に答えてくれた。答えられない場合には他の専門家や参考図書を紹介してくれた。教授は、いつもゆったりとした面持ちで通常の執務用デスクから立ち上がって壁沿いに置かれた木製のアームレスチェアに座り直し、私と向かい合う形で話をされた。週一回担当されていた講義で聞く快活な口調ではなく、静かに（多分私に配慮して）ゆっくりと話された。また、ある本についていろいろ談じている間、手にしているその本の余白に、思いついたことを鉛筆で書きとめる習慣があることに私は気づいた。また、何かを思い出そうとするとき、遠くを見るようにして意識を集中されることがあった——広大な知識の海に泳ぐ魚を一本釣りするように。お茶を出してくれたこともあった。どぎまぎしたのは、私の話に「おもしろい！そんなことは誰も指摘しなかったことだ。」と評価する反応をされたことだ。私は、この歴史にのこる英文学教授そして文芸批評家とともに、いわば文学談義をしながら、マートンの一角で静かな時を過ごしたことを、貴重な心の宝物として大切にしている。

貴重な経験はそれだけではない。私は教授の批評の源泉とも呼べるものを発見した。それはときおり教授が発する“*How fascinating! How fascinating!*”という感嘆の言葉である。二度繰り返されたのが印象的だった。前述したような意味での作品テキストに対する純粋な反応がそこにあった。interesting ではなく fascinating なのである。2022年の時点でも、一般向け書籍の執筆・刊行を行っ

ている教授の源泉はここだ。

ケアリー教授へ投げかけたたくさんの質問とそれに関する私の見解は、教授の目には非常に興味深く映ったようだった。あとでたまたまベイリー教授（John Bailey）と何度か話をする機会があった。「きみのことはケアリー教授から聞いたよ。きみが話した内容をとっても興味深いと言っていた。」そう話した教授も、ケアリー教授と同様、英文学教授でありまた文芸批評家として大活躍をしていた。お二人の中にわたしは共通点を見ていた。それは、イギリスの文化、社会、風土の中で育まれた文学への自然な愛着と感性、そして日々の読書の中で培われた文学的見識が仕事の根本に存在する、という点である。そしてその見識が、日々の学問的研鑽によって批評文の中に力強く表現されている。ほぼ同時期に、私はベイリー教授の著作の中で次の一節に出会った—

Empson needed when young to impress the sophisticated, in literary London and Cambridge. Bloom began his ministry, so to speak, among the savages, the braves in bare feet and jeans who squat on the campus around the tribal shaman. To spellbind them needs no less talent but a different technique: the sophisticated are caught by simplicity, and slangy untechnical surprises; the naive, by conjurations of power and the magic of mumbo-jumbo.

“‘A Poet insufficiently himself?’ : Bloom on Stevens” ,  
*Selected Essays*, Cambridge UP, 1984.

ウィリアム・エンブソンは文学界にデビューした頃、洗練された文学趣味を持つロンドンとケンブリッジの人々に感銘を与える必要があった。しかし、（アメリカの批評家）ハロルド・ブルームの場合、大学で教え始めた頃の様子は、いわば聖職者が野蛮人たちに布教するようなものであった。キャンパスで胡坐をかく裸足でジーンズ姿の学生たちは、部族のシャーマンを取り囲む勇ましいインディアン戦士だったのだ。この異なる二つのタイプの人々を呪縛するためには、才能に加えて二つの異なる技術が必要だ。文学的素養を持つ洗練された人々は、素朴さや俗語の非技巧的な意外性に心をひかれる。それに対して、土着の部族民

は、魔物を呼び出す呪文とわけの分からない言葉の魔力にとらえられるのだ。

(訳：崎村耕二)

原文にある savages や mumbo-jumbo という言葉は手厳しい。しかし、この批評は洗練された揺るぎない文学趣味の伝統を引き受けているイギリスの文学研究者だから言えることだと私には思われた。

ケアリー教授に見られる、作品に対する日常的な読者としての純粋な反応は、教授が書く名文の中に彫刻のように刻まれている。それは力強い言葉の彫刻である。それを見るために一番良いのは、サンデータイムズの数々の書評を読むことである。同時に、教授が書評で取り扱う書籍が文学だけでなく歴史書などの一般書にまで広がっていることも注目したい。

これまでまとまった形で教授の書評が編纂されたことがなく、私はこれまで残念に思っていた。以前、教授が出版された *The Unexpected Professor* (Faber & Faber, 2015) という自伝的な著作を読み終わったあとに、メールで感想を送ったところ返事がすぐに来た。私のことをよく覚えておられうれしくなった。折り返し私はさらにメールを送った。「教授がこれまで書かれてきた書評の数々は、それ自体が文学作品であり、書評の傑作と言えるものもあります。ケアリー書評集のようなまとまったもの読みたいものです」。数年後、書評集が出るということがわかりうれしくなった。

### 【Ian Hamilton の詩】

前述の *The Unexpected Professor* の中で、ケアリー教授がチューターを務めたことのある学生に、のちに詩人・批評家・編集者として活躍したイアン・ハミルトンがいたということを知った。ケアリー教授は学生時代の彼を“the cleverest”と記している (p. 181)。ハミルトンの方も、当時まだ若かったチューターのことを「元気いっぱいでお気焕发。彼と話していると何事も面白くなった」と後年、回想している (*Ian Hamilton in conversation with Dan Jacobson, Between the Lines, 2002, p. 43*)。

ハミルトン(1938-2001)は、私の知るかぎり、深い情感をきわめて平明な英語で書くことのできた最もすぐれた現代詩人の一人である。詩作に専念したわけではなく全作品をかき集めても百編に届かないほど寡作であった(全作品を *Ian*

*Hamilton: Collected Poems* [Faber & Faber, 2009]) で読むことができる)。他に文芸誌の編集者、伝記作者、批評家としても活躍したので、詩作はその合間を縫って行われた。しかし、次のような珠玉の名詩を残している。

### Old Photograph

You are wandering in the deep field  
 That backs on to the room I used to work in  
 And from time to time  
 You look up to see if I am watching you.  
 To this day  
 Your arms are full of the wild flowers  
 You were most in love with.

### 古い写真

あなたは深い野原をさまよっている  
 わたしがかつて仕事に使っていた部屋の  
 裏手にひろがる野原を。  
 そしてときどきあなたは  
 わたしが見ているかどうかたしかめようと  
 わたしを見上げる。  
 あなたが大好きだった野の花を  
 今日のこの日まで  
 腕いっぱい抱えて。

(訳：崎村耕二)

ここで私が注目するのは、まず第一に、この詩に出てくる二人の人物である。それは語りかけている者と語りかけられている者の二人である。二人以外には誰もおらず、しかも「わたし (I)」と「あなた (you)」という人称代名詞で示される。三人称代名詞は、空間的なあらゆる場所を巻き込み、一人称に対置させた場合（私と彼、私とそれ、等々）、多様な相対的關係を生じるが、他方、一人称と

二人称は、こちらのわたし、そちらのあなた、という対面関係が基本になる。

第二に、見るという行為による交感である。わたしはここにいてあなたを「見ている (watching)」。他方、「あなた」は「わたしがあなたのことを見ているかどうかたしかめようとして (to see) こちらを見あげる (look up)」。

第三に注目したいのは、こちらを見上げる「あなた」は、本当はここにいない、ということである。なぜなら「あなた」は写真にうつったあなただからである。わたしはたしかにあなたのことをじっと「見ている」。しかしそのことを「たしかめようとして」わたしを「見上げる」あなたは、写真のなかに閉じ込められた、ほんとうはここにいないあなたである。

第四は、もっともこの詩を感動的にしているものである。それは、実際にはここにいないあなたが写真の中で生きていることである。「あなた」は写真の中で、そしてわたしの心の中で生きている。なぜなら「ときどき (from time to time) わたしのほうを見上げるからである。」そして、この詩のはじめにあるとおり、あなたはいままさに深い野原をさまよっているのだ。

以上の四点を補う意味で、空間表現と時制表現にも注意したい。写真に写っている野原は、「わたしがかつて仕事に使っていた部屋」の裏手に広がっているが、その部屋は写真には写っていない。しかし、写真の外に広がる空間のどこかにある。また、写真の外はこちらにいる「わたし」を見上げて「わたし」のまなざしをたしかめる「あなた」と「わたし」の間には深い空間の幅が生じている。

あなたはいま現に「さまよっている (You are wandering)」。これは現在進行形だ。そして、場所は深い野原であるが、それは部屋の背後に接している (backs on to the room)。それは現在形により今の状態として表される。ただ、その部屋は「わたしがかつて仕事していた (I used to work in)」と語ることで、視点は一気に過去へ飛ぶ。こうして現在が、「あなた」とともにいた「あのときのわたし」の過去の行為と連結されるのである。「あなた」とともに過ごした生活さえも暗示する。さらに現在形で、「見上げる」(you look up) と言い、「ときどき」(from time to time) と言うことで、写真の中の「あなた」の時間の幅が広がり、現在くりかえされる行為として語られる。最後に描かれているあなたの姿、つまりあなたの腕が「花でいっぱいになっている (Your arms are full of ...)」のは現在だけのことではない。「この日までずっと」となのだ。こうして写真が撮られた過去の時点から現在までの時間の深みが表現される。最後の行で、「あなた」が野の花をととても好きだったことが言われるが、それは「わたし」が「あなた」

のことをよく知っていたことを暗示する。そして“you were most in love with”とあるように目の前にある写真の中の現在が、思い出の中の過去に直結する。

「わたし」と「あなた」、そして「わたしがあなたを見る」と「あなたがわたしを見ること」が簡素な語彙で詩行に織り込まれている。そして、写真の中の現在（あなたはさまよっている…等々）と写真の外の現在（わたしがまさにいま写真を見ていること）、写真の中の過去（わたしがその部屋で仕事をしていたこと）と写真の外の「過去」（あなたが野の花を好きだったこと）——これらの時間が重層的に一枚の写真の平面に深く刻まれている。

初出が1969年であることも含めて、もし伝記的な観点で第一行目“You are wondering in the deep field”を読み直すならば、最初の結婚で心の病を得た妻の心の荒野をさまよっていた姿と、写真の中で野原をさまよいながらも腕を花でいっぱいにしてこちらをときどき見上げる姿を、「わたし」は同時にみつめているのである。美しく深い詩だと思う。

次に挙げるもう一つの詩は、詩人としてだけでなく伝記作家として活躍したハミルトンの心の一つの断面を示している。

### Biography

Who turned the page? When I went out  
 Last night, his Life was left wide-open,  
 Half-way through, in lamplight on my desk:  
 The Middle years.  
 Now look at him. Who turned the page?

### 伝記

だれがページをめくったんだ？  
 わたしが昨夜ここを出たとき  
 彼の人生は、私のデスクのライトに照らされ  
 中途のまま大きく開いていた。  
 人生行路の真ただ中。  
 でも見てくれ、今の彼を。



だれがページをめくったんだ？

(訳：崎村耕二)

この詩は、先の「古い写真」と本質的に深いところでつながっている、と私は考える。ハミルトンは、若年で雑誌編集者として多忙な生活に放り込まれた。*The Review* や *The New Review* などは優れた文芸誌として歴史に残る。雑誌経営の困難と闘いながらほそぼそと詩作を続け、さらに伝記作者としての名も挙げた。そして伝記こそは、実在の人物と向き合う文学形式だ。そこでは本当に生身の人物に迫ることができるかどうかが究極の課題だ。私は、多くの文献を漁り、事実を積み上げ、その挙句、実際に生きていた人物の幽霊のようなものしか描けなかった研究者の評伝作品をいくつも知っている。しかし、ハミルトンは詩人の魂を持っていた人であり、その魂で人物に迫った人だと思う。

しかし資料の前で、どこまで人物に迫ることができるか。「人間」に迫ろうとすればするほど、作家は当惑する。「人間」は、それが物故者であっても伝記資料の中ではなく、どこかにいま生きているのだ。いや生きようとしているのだ。作家でもなく文芸ジャーナリストとしてでもなくまさに詩人としてのハミルトンの心の中に場所を見つけて生きようとしているのだ。「古い写真」の中で、過去となった女性がいま野原をさまよっており、ときどきこちらを見上げているように。

ハミルトン本人は、自分が詩人として寡作だということを自覚していたし、また指摘されても弁解がましいことは述べていない（前掲書 *Ian Hamilton: Collected Poems* の Alan Jenkins, “Introduction” および *Ian Hamilton in conversation with Dan Jacobson*）。ただ、全力で目の前の仕事に取り組み、クオリティーの高い一定の仕事をしながらも、自己評価を拒んだ詩人のデリケートな心の動きは次の詩に見ることができる。

Steps

Where do we find ourselves? What is this tale  
 With no beginning and no end?  
 We know not the extremes. Perhaps  
 There are none.

We are on a kind of stair. The world below  
 Will never be regained; was never there  
 Perhaps. And yet it seems  
 We've climbed to where we are  
 With diligence, as if told long ago  
 How high the highest rung.  
 Alas: this lethargy at noon,  
 This interfered-with air.

わたしたちはどこにいるのだろう。  
 はじめもおわりもないこの物語は何なのだ。  
 どこが最果てなのか知りたくない。  
 ひょっとしたら、果てなどどこにもないのだ。  
 わたしたちはいわば階段の上にいる。  
 眼下の世界はけっして取り戻すことができない。  
 そんなものはそもそもなかったのだ、たぶん。  
 それでもなんだかをはるか昔、  
 てっぺんは高いぞ、と言われて  
 この場所までがんばって登って来たように思える。  
 ああ、正午のこのけだるさ  
 このとどこおった空気。

(訳：崎村耕二)

晩年近くに書かれたこの詩から伝わってくるのは、人生の途上で生じた充足感のゆらぎでもなく、また、大きな功績をあげて一つの社会的地位を確立した文学者の自己点検でもない。一詩人がわれわれに投げかける根本的な疑念である。その疑念は私たちに「階段のてっぺん」を見上げさせ、また眼下の深い淵をのぞかせる。しかし答えはない。ハミルトン自身も生の言葉で答えることはなかった。彼はマシュー・アーノルド (Matthew Arnold) の言葉を引用し、それに心を動かされた旨を語っている。アーノルドの一節は次の通りである。

It is a sad thing to see a man who has been frittered away piecemeal

by petty distractions, and who has never done his best. But it is still sadder to see a man who has done his best, who has reached his utmost limits – and finds his work a failure, and himself far less than he had imagined himself.

*(Ian Hamilton, A Gift Imprisoned: The Poetic Life of Matthew Arnold*

[Bloomsbury, 1998] より再引用)

あれやこれやとささいな雑事に取り紛れ、最善を尽くして仕事に取り組むことがついぞなかった人を見るのは悲しいことだ。しかし、ギリギリのところまで頑張ったものの、取り組んできた仕事のがちになって無残な失敗であることがわかり、自分自身の真価が当初思い描いていたものよりもはるかに乏しいことに気づいた人を見るのはもっと悲しいことだ。

(訳：崎村耕二)

ハミルトン自身、この一節について“a very painful quotation”と感慨を語っているが、自分自身の人生についてはやはり判断を表明していない。伝記作家でもあるハミルトン自身、他者についても自分についても判断を下すことはできない、とわかっていただろう。できたのはただ一篇の詩を書くことだったのだ。

## おわりに

アーノルドの「とても痛々しい」文を引用したハミルトンの感慨は、人生における一つの区切りに達した人たちにとって共感できるものだろう。しかし、若い人々にとっても「階段のてっぺん」を見上げて何が見えるか、という問いに対して「階段」という詩は無言の答えを示しているように見える。

わたしは定年退職を迎えるにあたり、ここ七年ほど取り組んできた「医学英語の語源と語形成」の講義をほぼ満足な気持ちで振り返ることができる。しかしこれで終わりではない。これから先は、ハミルトンが見上げた「高いてっぺん」を持つ垂直な階段ではなく、いわば水平に敷かれた階段を一步ずつたどっていきたいと思う。